松本時代の北杜夫　其の二
――初期詩篇等の諸相――

竹内　正（日本歌人クラブ会員）

はじめに

北杜夫はその松本時代に歌を詠み、晩年『歌集　寂光―北杜夫若年歌集』として上梓した。拙稿「松本時代の北杜夫　其の一――『寂光』に映された父茂吉の陰影――」[1]（以下「其の一」と表記）では、『寂光』の解釈にあたって、父茂吉の初期歌集『赤光』『あらたま』を中心に「「くれなゐの茂吉」の陰影」を検証し、茂吉短歌によって文学に覚醒していった当時の杜夫の内面に迫るべく論考を進めた。

松本における杜夫の文学的足跡は短歌の他に、詩や随筆等もあるが、当時の杜夫の日記[2]の全貌が現在未公開ということもあって、それらの包括的な集約整理は今後にまたれるところである。しかしながら、短歌の他にも表現方法を探り、詩や随筆等を表していた松本時代の杜夫の姿とは、一体いかなるものであったか。旧制高等学校記念館[3]の常設展示には、かつての旧制松本高等学校（以下「松本高校」と表記）の学生や寮生の暮らしぶりが、「旧制高等学校の歴史」「寮生活」「勉学」「有名教授」「記念祭」等のカテゴリー毎に大変分かりやすく紹介されている。これらの貴重な展示を念頭に置きながら、当時の杜夫の姿に迫るべく論考を進めていきたいと考える。

本論考では、これまで各誌、書籍、全集等に発表、紹介された当時の杜夫の作品について、可能なところにあたり、現段階で松本高校時代の文学的足跡を一旦整理しておきたいと考える。次に、それぞれの作品について関連する資料を参考に、創作の背景を探りながら解釈を行い、松本時代の特徴的な様相を明らかにし、考察を加えていくこととする。更に、本稿の最終章では杜夫の文学活動全般における松本時代の位置づけを筆者なりに試みていきたいと考える。

一、研究対象作品

1　松本時代から仙台時代の主な足跡（『幽霊』まで）

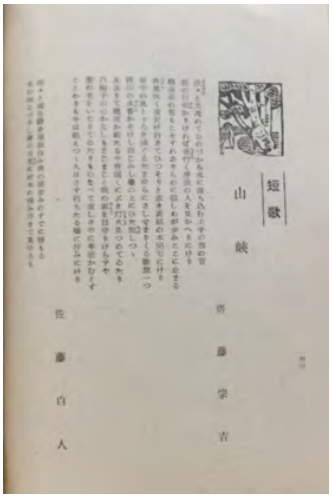
麻布中学校までは昆虫採集に熱中する理科少年の杜夫であったが、昭和二十年（十八歳）、松本高校入学の頃、父茂吉の短歌に感動し茂吉を崇拝するようになり、徐々に短歌を詠んでいった。しかし、昭和二十二年（二十歳）十月、「歌など作るな」の茂吉の厳命を受け、医学部に進学する勉学のため、杜夫は作歌を一旦絶っている。

ところで、杜夫は松本高校二年の三学期頃から詩作も始めていた。当時は「高村光太郎、萩原朔太郎、中原中也、三好達治、大手拓次、立原道造」（全集第十五巻「年譜」P.364）等の詩を耽読し、寮歌にも応募した。「人の世の」[4]が入選し寮誌「思誠」に発表された。また同誌には、同時掲載の随想「蟲と共に」・短歌「山峡」連作十首

（齋藤宗吉）等も発表された。続いて九月には校友会会誌「山脈」[5]に随筆「六脚蟲の世界」・短歌「やま水」連作六首（齋藤宗吉）がそれぞれ発表された。「年譜」によると「高校三年の日記は九割まで詩で書かれていた」（P.364）とある。杜夫はこの他にも、高校二年の学期末試験では物理や数学の答えの代わりに詩や短歌を書いて点をもらうこともあった。

その後昭和二十三年（二十一歳）、東北大学医学部入学後は詩に加えて徐々に短篇創作に目を向けていった。大学一年の頃の日記は、『或る青春の日記』[6]にみられるように「散文の練習のための断想や短文の羅列」（「年譜」P.364）となっていった。同年九月には「文学集団」の村野四郎選の詩欄に、「北宗夫」のペンネームで投稿し、十月号に「あの頃の歌」が掲載された。大学二年でも「文学集団」への詩の投稿はつづき、度々掲載されたが、十月になると「KRANKHEIT」の名の下に「百蛾譜」「蝦蟇」「酒」「幼いメルクリウス」「岩造の話」「青春」「硫黄泉」などの短篇を執筆した。そして、大学三年の昭和二十五年（二十三歳）には、保高徳蔵主催の「文藝首都」に初めて「北杜夫」のペンネームで「百蛾譜」を投稿、四月号短篇欄に掲載された。一方詩では「文学集団」と並行して、同じく村野四郎選の雑誌「詩学」にも投稿を始め、四月の「Schönheit」以降度々掲載されていった。その後「少年」等短篇小説が書き継がれ、大学四年以降は「文藝首都」の例会にも出席するようになり、執筆の中心が小説となっていった。

昭和二十七年（二十五歳）、東北大学医学部卒業、引き続き同大学附属病院にてインターン実習を受ける。昭和二十八年（二十六歳）、父茂吉心臓喘息のため逝去。五月慶応義塾大学医学部神経科教室に入局、助手となる。同年「幽霊」の構想に取りかかり、翌昭和二十九年「文藝首都」に連載し、五月に完結となった。



2　研究対象作品

松本時代から仙台時代、更には「幽霊」執筆までの足跡を概観したところで、本研究対象作品の領域を以下の通りとする。

○『青春詩集　うすあおい岩かげ』[7]の全作品。但し、本詩集は松本時代の詩群、松本時代の体験を素材とし仙台で回想して作った詩群、仙台時代の心象等を描いた詩群と大きく三つに分類できる。そこで、中心を松本時代の詩群及び雑誌入選詩に置き、それ以外は補足的資料として扱っていくとする。

○　物理・数学の答え代わりの詩や短歌

○　寮歌「人の世の」

○　随想「蟲と共に」

○　短歌「山峡」十首

○　随筆「六脚蟲の世界」

○　短歌「やま水」六首

○　日記「十二月五日」

もっとも、これらの詩篇等の解釈及び様相の検討にあたっては、必要に応じて杜夫のその他の文学作品、茂吉の日記、その他関連の見られる文章等にも目を向けながら、その創作の背景を明らかにすべく論考を進めていきたいと考える。まずは以下、執筆順に時系列で研究対象としたい作品を整理する。（執筆した月・作品・初出等）

昭和二十年（一九四五年）十八歳　松本高校一年

6　短歌（『寂光』）　中央公論社（昭和56・4）

昭和二十一年（一九四六年）十九歳　松本高校二年

短歌（『寂光』）　中央公論社（昭和56・4）

12　「磁場の説明」　学期末試験物理答案

12　詩「僕らの物理学」　学期末試験物理答案

12　短歌三首　学期末試験数学答案

昭和二十二年（一九四七年）二十歳　松本高校三年

2頃　歌詞「人の世の」　「思誠三月　第二十四号」

2頃　随想「蟲と共に」　「思誠三月　第二十四号」

5迄　短歌「山峡」連作十首　「思誠三月　第二十四号」

（全歌『寂光』収録、昭和20・7～昭和22・5）

6　詩「山村にて」　『うすあおい岩かげ』

6迄　短歌「やま水」連作六首　「山脈」（松高校友会会誌）

（全歌『寂光』収録、昭和22・3～昭和22・6）

9頃　随筆「六脚蟲の世界」　「山脈」（松高校友会会誌）

10迄　短歌（『寂光』）　中央公論社（昭和56・4）

11　詩「寂寥」　『うすあおい岩かげ』

11　詩「停電哀歌」　『うすあおい岩かげ』

12　詩「木枯」　『うすあおい岩かげ』

12　日記「十二月五日」　『どくとるマンボウ青春記』

昭和二十三年（一九四八年）二十一歳　東北大学一年

1　詩「真夏の衝迫」　『うすあおい岩かげ』

3　詩「斑雪」　『うすあおい岩かげ』

3　詩「帰ってくるものに」　「文学集団　四月号」（昭24・3）

7　詩「穂高を見る」　「文学集団　五月号」（入選）（昭24・4）

9　詩「うすあおい岩かげ」　「文学集団　五月号」（昭24・4）

9　詩「あの頃の歌」　「文学集団　十月号」（佳作）（昭23・10）

11　詩「成長」　「文学集団　四月号」（入選）（昭24・3）

昭和二十四年（一九四九年）二十二歳　東北大学二年

3　詩「細菌教室にて」　「詩学　十・十一月号」（昭25・10）

3　詩「愚問」　「詩学　十二月号」（昭25・11）
4　詩「優曇華」　「文学集団　七月号」（昭24・6）
4　詩「漂流」　「詩学　八月号」（昭25・7）
5　詩「かげりゆく心に」「文学集団　九月号」（佳作）（昭24・8）
5　詩「絶縁状」　「詩学　七月号」（昭25・6）
5　詩「果のないゆらめき」「文学集団　十二月号」（昭和24・11）
6　詩「蒼天」　「文学集団　三月号」（選外）（25・1）
8　詩「Schönheit」（「美について」）「詩学　四月号」（昭25・4）
8　詩「黒い高原」　「文学集団　三月号」（入選）（昭25・1）
8　詩「出発」　「文学集団　五月号」（佳作）（昭25・4）

二、初期詩篇等の様相

1　答案用紙への詩等

『どくとるマンボウ青春記』によると、松本高校の当時の試験では、一部の学生たちの間で「手の出ぬ問題に、詩やイタズラ書きをする行為」[8]（全集第十三巻P.52）があり、教師を感心させるようなものについては「点をくれる先生も存在した」と記されている。杜夫も当時苦手だった物理や数学の答案用紙に、短歌や詩を書いて合格点をもらったと回想している。二年生の十二月、学期末試験の物理では、問題「（前略）コイルに流れる全電気量は何クーロンか」に対する杜夫の回答は以下である。

（答）電磁感応ニヨリ、こいる〔ママ〕ニ電気ガ流レルガ、コレハ最モヨク知ラレタ公式ニヨツテ式ヲ立テ（物理学ノ本ヲ見ラレタイ）、上記ノ数値ヲ代入シ、多少数学的ニコレヲヒネリマワスコトニヨリ、答ヲ得ルハ容易ナコトデアル。先生自ラコレヲ試ミラレタイ。　（全集第十三巻P.52）

更に、その答案用紙の下の余白には以下のような「僕等の物理学」[9]という文語的自由詩（一部口語体表記）を書いて提出した。

僕等の物理学

恋人よ
この世に物理学とか言ふものがあることは
海のやうにも
空のやうにも　悲しいことだ
恋人よ
僕はこんなに頭がよいのに
この物理学のおかげでもって　あなたから
白痴のやうに思はれてしまった。
あなたがそんなに心配さうに　僕の顔をのぞきこむから
僕は昨日死んだつもりになって
生まれてから三十分とつづけたことの無い物理の勉強を
なんと六時間もやったのだ。
僕はこんなに頭がよいし　あなたの瞳も元気づけてくれた
から
たとへノートが七十八頁あったとしても
参考書が二百四十三頁あったとしても
活字の数が十三萬八千六百五十六あったとしても
もういくら何だってできるつもりでゐたのだったが……

恋人よ
僕が物理で満点をとる日こそ
世界の滅亡の日だと思ってくれ
僕等にはクーロンの法則だけあれば沢山だ
二人の愛は距離の二乗に反比例する
恋人よ
僕等はぴったりと抱き合はう！（帝国芸術院賞受賞作品）

（図録 P.17）

この詩は、物理学ができない為に恋人から白痴のように思われてしまった「僕」が、物理の勉強をどれだけ必死にがんばったかを述べたあと、「できるつもりでいたのだったが……」と、諦めると思いきや、さっと発想を転換し、「僕が物理で満点をとる日こそ／世界の滅亡の日だと思ってくれ／僕らにはクーロンの法則だけあれば沢山だ／二人の愛は距離の二乗に反比例する／恋人よ／僕らはぴったりと抱き合はう！（帝国芸術院賞受賞作品）」と情熱的な求愛へと変容していく。「恋人よ」と呼びかける句のリフレーンにより「僕」の世界に引き込み、クーロンの法則を掲げ、「僕」の恋する思いを訴える圧巻は奇妙な感動にさえ引き込まれる。

「恋人よ」の呼びかけの句は、当時の杜夫が耽読した大手拓次の「夜の脣」、萩原朔太郎の「幻の寝台」、中原中也の「山羊の歌〈みちこ〉」の「無題1」等の詩にも見られる呼びかけ表現と類似している。更に「無題1」は「こひ人よ、おまへがやさしくしてくれるのに、私は強情だ」（傍点引用者）にはじまり、詩句の結びには「おまえに尽せるんだから幸福だ！」と感嘆符が置かれる。この「逆接フレーズから感嘆」の文体は、本詩でも見られ「あなたがそんなに心配そうに僕の顔をのぞきこむから」「あなたの瞳も元気づけてくれたから」、「できるつもりでゐたのだったが……」（傍点引用者）と逆接フレーズを置き、「僕等はぴったりと抱き合はう！」と感嘆で結んでいる。また恋人の期待に応えられない情況も共通しており、杜夫が中也の「無題1」に影響を受けた可能性が指摘できる。

「其の一」で紹介した「北杜夫―すばらしき仲間たち」のトーク番組では、小塩節が一篇を朗読した後、「恋人がいたのですか」と杜夫に質問するシーンがあった。杜夫は「架空のものでしょう。おそらく」と答えていた。

『どくとるマンボウ青春記』の「瘋癲寮の終末」には、プラトンの『饗宴』を原典とする「太陽党」（ゾンネン・パルタイ）を数人の友人と結成し、「ギリシャの少年愛」に凝った時期について述べている。杜夫は、「思し召しの下級生」（デル・リーベ）に「泉」（ブルンネン）と名づけ、呼び出し、写真を撮り悦に入っていた。本詩の「恋人」にはそうした純粋な「愛の一段階」としての半ば遊び的な意味も込められていた可能性がある。

ところで杜夫の物理の恩師、松崎一は「答案にまつわることども―答案と昔の高校生」[10]に、答案を返した後、廊下の曲がり角で偶然杜夫と出くわしたときのやりとりを回想している。高校時代の杜夫の人柄の一端を実感できるエピソードであると考え、以下に紹介する。

「先生！　ひどいや、あんな立派な答案に注意点をつけるなんて！　先生の審美眼をうたがいますよ。おかげで親父(茂吉)に油をしぼられちゃった！」

「そうか？　君の親父がそんなにものわかりの悪い親父だと

は思わなかった」

と、私。とたんにみごとなお返し。

「そうですか？　私は先生がそんなに先見の明のない人間だとは思わなかった！」

学校のピンポン部の主将、校友会の理事をつとめ、クラスは勿論各方面に明るい雰囲気をまいた男である。

（P.46）

また、「小さき疾風怒濤」には、数学の「意味すらもわからぬ問題に対して記した短歌」として次の三首を紹介している。杜夫のお情け点を希う直接的な心情を、教授名入りで呼びかける作品である。

問題を見つめてあれどむなしむなし冬日のなかに刻移りつつ
怠けつつありと思ふな小夜ふけて哲学原論をひた読むわれを
時によりできぬは人の習ひなり坂井教授よ点くれたまへ

（全集第十三巻P.53）

こうした試験に対するイタズラ心の他にも、当時の松本高校生の生活全般には、どこか純粋な遊び心が在ったものと推察される。松本高校三年頃の「銅の時代」（『どくとるマンボウ青春記』）には、「私たちはかなりの愚行を重ねて日を送ってきた」（全集第十三巻P.83）と振り返っている。そして「たとえば読書ひとつにしろ」、「それがおもしろかったから読み、素晴しかったから読み、何が何やらわからないから驚嘆して読んだのだ」と述べ、「精神の飢餓が貪欲に活字を求めた」と回想し、「すべてが遊びの要素を含んでいた。それだけ自由であったともいえる」（傍点引用者）と記している。

また、杜夫が松本高校時代に体験したその破天荒な生活ぶりは、昭和二十年の思誠寮入寮時の歓迎ストームに始まり、時には抱腹絶倒の笑いを誘い、時にはしみじみとしたペーソスを漂わせる。寮の最大行事記念祭のジャンボン行列、杜夫がアクターとして出演した有島武郎の「ドモ又の死」、仲間と涙したファイアー・ストーム、太陽党の立ち上げ等々過ぎし日々について、杜夫は「何者かに憑かれていた」「須臾の間」であったと記している。

杜夫の一年下級生の小林澈郎は「北杜夫のいた松本」（「図書5」岩波書店、1998）に杜夫との思い出を回想している。思誠寮西寮三寮四号の当時の杜夫の部屋には「墨痕鮮やかにキルケゴールの「憂愁の哲理」よろしく「瘋癲の哲理憂行」と大書した紙が壁に貼られていた」という。幼い頃、脳病院（当時は瘋癲院の呼称も）の患者らと遊んだ経験を持つ杜夫は自らを「瘋癲」と称し、そのようなパロディーを編み出したものと考える。

このように杜夫は「黄金の時代」ともいえる松本高校一年、二年の青春時代を時には少年のようにイタズラもしながら、明るく楽しみ、遊び、そして時には純粋に哲学し、生き方を求めつつ謳歌していった。そこに「純粋な遊び心」という一つの様相を見ることができると考える。終戦直後の昭和二十一年当時、食糧難の最中に人生を切り開こうと学んでいた学生を、寛い懐で受けとめるような大らかで自由な空気が松本高校、松本の町に在ったと察せられる。

2　寮歌

松本高校の寮歌は、「松高寮歌選集」（松本高等学校95周年記念）に収録されているが、杜夫作詞の「人の世の」は同窓生の歌声で二十二曲の中ほどの十二番目に入っている。

松本高等学校　寮歌　（昭和二十一年）

「人の世の」[11]

作詞　斉藤宗吉
作曲　松尾先見

一　人の世の美しきものを　萠え出づる落葉松の芽に
想ひつつ一人わけ入る　細道は幽か続きて
夕映の赤きころほひ　迷鳥の心慕ひぬ

二　人の世の清けきものを　わが歩みしばし止めて
かへりみる谿間の苔に　木漏日の斑にさして
厚かりし友の情けを　奏でつつ水流れ行く

三　人の世の悲しきものを　一夜寝し山小屋の灯の
ほそ〳〵とゆらめく如く　語らへる刻は積りて
相抱く真友の中より　生れ出でし真実なりしか

四　人の世の寂しきものを　先人の求め歩みし
この道は遂に音無く　長き影移ろふ涯に
安息の心抱くは　若人の幾人ならむ

（図録 P.24）

本歌詞については、既に「其の一」第四章、第二節第三項「「寂し」の関連語句」で、『寂光』昭和二十二年「五月集」に収録されている「人の世のこの寂しさを知りそめて幾夜か経たる降る雨の音」（詞書「寂寥」）の長歌的な位置づけをしてある。寮歌掲載が三月であることから、「僕等の物理学」に次ぐ最も初期の歌詞と位置付けられる。「其の一」ではその詳細な解釈を省略したが、本論考で触れおく。

「人の世の」は寮歌の歌詞を意識し、思誠寮寮生の愛唱歌を意図して創作されている。当時、全国の旧制高等学校にはそれぞれの寮歌があり、寮生の自治精神や文化を象徴していた。寮の記念祭や他校との対抗試合等、生活の様々な場面で歌われていた。まず、杜夫にとって寮歌とはどのような意味を持っていたかについて触れ、その後構想と叙述に目を向け、解釈していくとする。『どくとるマンボウ青春記』では度々寮歌について触れている。主なものを列挙する。（傍点引用者）

○「高等学校の寮歌では、青春とは、よく涙とか理想とか追憶とか戦いとか苦悩とか想像だとか歌われる。」（全集第十三巻 P.19）

○「ストームというのは、やたらに騒々しい（中略）、なんたる天下一品のバカ騒ぎ（中略）、寮歌のリズムに合せて、乱暴にもとびあがり、踏みにじるのである。」（全集第十三巻 P.25）

○「「春寂寥の洛陽に　昔を偲ぶ唐人の　傷める心今日は我……」という『春寂寥』や「夕ぐるる筑摩の森をそぞろ行く……」という『夕暮るる』などのもの悲しい逍遥歌もあり、こうした独唱がかすかに枯野の涯からひびいてくると、胸がじいんとしてくるのだった。」（全集第十三巻 P.27）

○「寮では食事の支度ができると、大ダイコを鳴らして知らす。／秋高原に風立ちて　玲瓏澄むや山脈の／彼方に物の響ありツォイスの庭の召太鼓／という寮歌があったが、私たちはどうしてもこの「召太鼓」を「飯太鼓」と判ぜざるを得なかった。」（全集第十三巻 P.35）

○「あるとき私は二階で寮歌を唄い、血潮がのぼってきたので大声を出したところ、父は血相を変えて怒った。」（昭和二十一年夏、大石田聴禽書屋にて、引用者記）　（全集第十三巻 P.40）

○「ファイアーを囲んでデカンショを踊る。そのあと数多くの寮歌を声の嗄れるまでがなる。（中略）自分たちはせい一杯全力をふるったのだという満足感と感傷がこみあげてきた。委員の大半は泣いた。」（記念祭のファイアー・ストームの場面、引用者記）　（全集第十三巻 P.51）

○「一見自堕落な寮生活をつづけてはいたが、私たちの心の底には、青年の悩み、孤独、疑惑などが常につきまとっていた。この年の寮歌として私が応募した「人の世の」という、ずいぶんと感傷的な歌詞が当選したのは、その一つの表れだったかも知れない。」　（全集第十三巻 P.64）

このように寮歌は杜夫にとって、ストームや寮祭での仲間との大合唱はもとより、大石田での茂吉との生活の折などにも独唱し、ふと口ずさむほどに身に沁みついていたものであったと考える。また、寮の食事に聞き、寮の部屋にいると何処からか聞こえてくる『春寂寥』や『夕暮るる』に琴線をふるわすほどに聞き入ったこともあったであろうと解することができる。更に「人の世の」創作の動機は杜夫が自ら記すように、自身の「悩み、孤独、疑惑」といった内面を表現せざるを得ない思いからであったことが窺える。

「人の世の」は五七調の文語定型詩の形式をとっており、各番連に五七の句を六つずつ置いて万葉調を醸し出している。次に本歌詞の構想と叙述に目を向けていくとする。

まず、各番連の冒頭に「人の世の」のリフレーンを置き、「美しき」「清けき」「悲しき」「寂しき」とナイーブな感傷を表す形容詞が独特な韻律をつくっている。また、各形容詞に添えられる「ものを」は順接にも逆説にも使われる接続助詞であるが、本歌詞では「ものを」以下に内容の事柄を詳しく述べていることから、「人の世の～ものを」を倒置的に解し、詠嘆の意味として捉えていきたい。各番連の叙述を丁寧に見ると、四つの番連が四季のフレーズであることが理解できる。

一番では、「萌え出づる落葉松の芽」「迷鳥」に春の季節が感じられる。ここでの「迷鳥」は群からはずれてしまった冬鳥（渡り鳥）と考えられる。杜夫は落葉松の新芽が萌える春の心境を迷鳥の心に重ね、その孤独で寂しい心から、人の世がいとおしいほどに恋しく「美しきものを」と詠嘆している。

二番では、「谿間の苔」「木漏日」に夏の季節が感じられる。「谿間の苔」はある時友と訪れた北アルプスへの道端などで目にしたものかと考えられる。杜夫は夏山に友と訪れた心境を高山から流れ下る清流の流れに重ね、友の情けを純粋無垢で透明な心と感じ、人の世が「清けきものを」と詠嘆している。

三番では、「山小屋の灯」「語らへる刻は積りて」に秋の季節が感じられる。徐々に日が短くなり、山小屋の灯が印象に残る中、夜長の秋を友と語り合ったと解する。杜夫はこうして友と語り明かす中、互いの真実の言葉を悲しくなるほどいとおしく感じ、「悲しきものを」と詠嘆している。

四番では、「この道は遂に音無く」「長き影移ろふ涯に」に冬の季節が感じられる。冬の日は低く影を長くし、山道を行く人の足音も無くなってしまったと解することができる。真実を求めて歩もうとする若者の一体どれほどが安息の心を抱くことができるであろうか、

なんと「寂しきものを」と詠嘆し結んでいる。

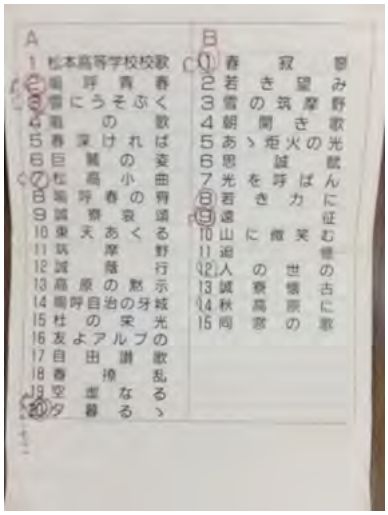
本歌詞はこのように叙述を解釈してくると、「人の世の」の句の後には杜夫が純粋に「美しきものを」「清けきものを」「悲しきものを」「寂しきものを」と詠嘆を重ねていると理解できる。そして、それらの詠嘆のすべてが一つになった、言うにいわれぬ心境を、題名「人の世の」の空白の述部に込めたものと解釈することができる。青年の感傷的な心を象徴する寮歌にふさわしい歌詞であると言えよう。

晩年、杜夫の自宅寝室の枕元に置かれていた貴重なカセットテープ「松本高等学校寮歌選集―祝　松本高等学校七十周年記念祭」（昭和六十三年九月十一日、松本高等学校同窓会）が、信州大学附属中央図書館の「北杜夫文庫」に寄贈されている。テープのラベルカード[12]を見ると、杜夫が愛聴したと思われる寮歌に○印がつけられている。このことからも、いかに杜夫にとって寮歌が心の友となっていたかを窺い知ることができる。寮生の精神を象徴する寮歌を松本時代の杜夫を理解する上での様相の一つに位置付けておきたい。

「画　柚木沙弥郎　旧制松本高等学校　昭和一七年卒」

3　ファーブルへの憧れ

杜夫の昆虫好きについては、「其の一」第二章「松本高校入学の経緯」で述べた。本節では、まず松本時代の昆虫採集の概要を時系列で整理し実際の様子について検証した上で、当時の作品解釈から杜夫が抱いていた昆虫への熱い思いやファーブル(Jean-Henri Casimir Fabre,1823-1915）への憧れの内実を明らかにすべく論考を進めていくとする。



（1）昆虫採集の概要

松本高校時代になると、松本の東方に位置する王ヶ鼻や三城など

の山や高原、上高地方面、寮や下宿の周辺の市街地等様々な場所で昆虫採集をしている。図録[15]には採集地毎の詳細がまとめられている。以下に日時と方面場所、回数（○の数は方面別の回数）等を時系列で再構成し、整理する。

昭和20年6月16日～21日	松本①
6月28日	入山辺～王ヶ鼻①
7月25日～29日	島々～上高地①
10月2日～25日	松本②
11月26日・30日	三城②
昭和21年3月22日	松本③
4月9日～22日	松本④
4月15日	島々②
4月23日	島々谷③
4月26日	三城～王ヶ鼻③
4月29日	島々④
5月7日～22日	松本⑤
5月15日	入山辺・王ヶ鼻④
5月22日	三城⑤
6月6日	島々⑤
6月12日	三城⑥
6月16日	上高地⑥
6月23日	松本浅間温泉⑥
11月22日	上高地⑦
11月26日	松本⑦
昭和22年4月20日	島々谷⑧
4月25日	松本⑧
5月20日	三城⑦
5月25日	三城⑧
6月10日～12日	島々～上高地⑨
7月7日	三城⑨

採集方面別の回数は松本市街地8回、入山辺・三城・王ヶ鼻方面9回、島々・上高地方面9回となりほぼ同回数である（合計26回）。各年度の回数は昭和20年5回、昭和21年15回、昭和22年6回と、昭和21年の回数が前後の年に比べ三倍程となっており、松本高校二年時が最も意欲的に昆虫採集に出かけていたことがわかる。

松本高校三年の秋、杜夫は進路について考える時期を迎えた。「銅の時代」にはファーブルに憧れた当時について以下のように述べている。

これだけは中学の始めから愛読した『昆虫記』に見られるファーブルの生涯は、私には理想像と映った。『昆虫記』は比類のない名著として、またファーブルの晩年は彼の営々とした努力にふさわしいつかのまの栄光に輝いたのだが、学者たちすべてから正当な評価を受けたわけではなかった（中略）

しかし私は、ファーブルのような道を進みたいと思った。昆虫を蒐めたり観察をしたりすることは大好きだから、いくら怠け者の私であれ、ひとかどのとまではいかずとも、まあまあの学者になれよう。一方、自分には詩人の素質もあるようだから、博物学と文学を結びつけた本のようなものを書けたら、とひたむきに夢想した。（傍点引用者）　（全集第十三巻 P.85）

こうした杜夫の動物学やファーブルへの憧れは、当時の作品にどのように描かれていったのであろうか。以下に随想「蟲と共に」、詩「山村にて」、随筆「六脚蟲の世界」の解釈を進めながら、杜夫の憧れの内実について考察していくとする。

（2）随想「蟲と共に」

杜夫は昭和二十二年（松本高校二年）、「思誠三月第二十四号」に「蟲と共に」を発表した。一篇は「六脚蟲の世界」と同様に、その後単行本未収録であったが、『マンボウ思い出の昆虫記―虫と山と信州―』[16]に収録された。

一篇は、同年九月に「六脚蟲の世界」を校友会誌に発表するおよそ半年ほど前の執筆であり、当時徐々に自分の進路を考えるようになっていった杜夫が、題名のように「蟲と共に」生きていく道を目指していることを、初めて公表した作品と言えよう。まず作品の構成を検討した上で、作品主題へと目を向けていくとする。（ページ数は注（4）による）

本作品は全体を大きく五つの段落に分けて構成されている。

第一段落は冒頭にドストエフスキーの「白痴」よりムイシュキン公爵の嘆き「（前略）凡てに縁なく仲間はづれだつた」（P.51）を引用している。この公爵の嘆きは、人間の普遍的な嘆きとして捉えられ、まず人間存在の孤独感に目が向けられている。杜夫はそうした魂の深部から感じられる孤独感であっても、新しい眼をもって自然を眺めれば「小さな六脚蟲の世界も、たしかに我々をなぐさめてくれるだけの深さを持つてゐる」（P.52）とその価値を述べる。

第二段落では、信州の昆虫たちと初めて出会った時のことが描かれ、当時の嬉しかった想いが回想される。四月の中頃浅間温泉の裏山で、ビロウドツリアブが音もなくスミレの蜜をもとめる姿。翅に黒い斑点を持つ別種を見かけ、その五日後三城牧場へ行くと、再びそれを尾根で見つけたこと。他にも、少年の頃武蔵野では見られなかった、亜高山地帯に生息するエルタテハ・ヤマキチョウ・ギフチョウ等を見た時の喜びが描かれる。

第三段落では、リンネの「自然の最大驚異は微細なるもののうちに存す」（P.52）を引用し、蟻の仲間に目を向け、アカヤマアリの類についての関心やその生態を中心に以下のように詳しく綴っている。

- アカヤマアリとエゾアカヤマアリの同定は難しいこと。
- 信州にツノアカヤマアリは分布している由だが、まだ見たことがないこと。
- 王ヶ鼻登山道で多く見かけたエゾアカヤマアリ。
- アカヤマアリはサムライアリと共に、クロヤマアリの巣から蛹や幼虫を自分の巣に運び込み、奴隷とする。アカヤマアリは奴隷なしでも生きられるが、サムライアリは奴隷が居なければ食物のとり方を知らず、餓死してしまうということ。
- 中央山岳地帯の平地では見られない北方系の種の分布。興味深い垂直分布の状況。
- 小灰蝶の一種ゴマシジミとクシケアリとの間に観られる面白い共生関係の紹介。信州ではこれらの蝶と蟻が共に揃っているから、観察され生活史が明かされたら驚くに違いないこと。

以上のように第一、二段落で述べた「小さな六脚蟲の世界」の具体的な観察内容や考察について科学的な筆致を交えての詳細を示している。

第四段落では、第一、二、三段落を一旦集約し、自分が目指していきたい方向について表明している。第三段落のように蟻一つをとっ

ても、様々な虫の世界を見ることができるが、素人は研究対象を選ぶとき、分類学は新しい文献も必要となり、同定も困難な分野であるから、生態学の分野に目を向けるべきであると自らの方向性を具体的に示している。さらに杜夫が憧れていたファーブルの言葉「本能の領域は我々の一切の學説から逃れてゐる法則に支配されてゐるのだ」（P.54）を加え、「哲學者の様に思索し、美術家の様に觀察し、詩人のように感覺した表現」（P.54）をすることを願い、「セリニャンの寂寥の中のこの隠者」（P.54）ファーブルの生き様を理想として描いている。

最終第五段落では、二月を迎えている現在、オオイヌノフグリが小川の岸辺に咲き、落葉松の玉芽が萌え出で、ウスバシロチョウやミヤマカラスアゲハ、花天牛（はなかみきり）の世界に同化して野山に飛び出していきたいとまとめている。

一篇の主題は、「小さな「六脚蟲」にも孤独感をなぐさめてくれる価値があると考え、昆虫観察の具体的体験から蟻の世界の共生関係の面白さを紹介し、春になったらファーブルのように、昆虫たちと一つになって野山に出かけて行きたいと、夢を描いている杜夫」と捉えられる。

（補記）

寮誌「思誠」に「蟲と共に」と同時掲載された短歌「山峡」連作十首には、「其の一」第四章二節二項で述べた「くれなゐの茂吉」の陰影」とも言えるナイーブな叙述（「心かなしも」「赤き表紙の本」「入日指す」等）の叙述があり、一篇の冒頭の孤独感を当時の短歌と重ねて理解することができる。

（3）詩「山村にて」

本詩は、現在確認できる杜夫の初期詩篇の中では、「僕等の物理学」（昭和21・12）に次ぐ作品で、詩作を始めた頃の杜夫の素朴な思いが素直に描かれている。（題名、歌集掲載番号）

山村にて　32

げんげの花畠
ここは鋤きかえされてもう水
水の上にはさざ波
夕日のかげがうつる

和田村のものしずかなゆうべ
灯にやってきた名も知らぬ羽虫
畳の上に遊ぶ白い小さな兎の子
玩具（おもちゃ）のようで
ぼくの童心が久しぶりによみがえる

春やまの話
新緑の話
そうしたものが今夜の夢を彩どるだろう
この山里に
ひっそりと孤り息をする

（一九四七年六月）（『うすあおい岩かげ』（PP.82-83））

昭和二十二年、三年生になると杜夫は寮を出て下宿生活をするようになり、第一章第一節で述べたように日記は九割が詩の形式で書

かれ、詩への関心が高まっていった。「役立たずの日記」には、光太郎、朔太郎、中也等を初め「かなりの人の詩集を私は所有するようになっていた」（全集第十三巻 P.73）とある。当時の杜夫は校友会の運動部総務の仕事をし、五月の駅伝、卓球のインターハイとつづいた対外的活動が終了した時期であった。その六月に作られた「山村にて」はどのような構想と主題があったのであろうか。まずは一篇創作の背景を明らかにし、作品主題に迫っていくとする。

「松本高校時代の松本周辺での採集品」[17]には、杜夫の当時の昆虫採集の記録が詳しく残されている。その「島々から上高地まで」には、表「上高地方面の採集記録」の九回目（最終回）に「1947 VI 10～12 島々から上高地」（図録 P.52）とあり、蝶・蛾・蜂・蟻・蝿・虻等十七固体を採集した記録が残っている。また杜夫が辿った実際の行程も地図に示され「島々―島々谷―徳本峠―上高地」のルートであったことが明示されている。

詩中二連目冒頭に「和田村のものしずかなゆうべ」とあるところから、一九四七年（昭和22年）六月十日から十二日にかけての採集の際、和田村の宿に逗留し、島々から上高地に向かった時の心境を詩に表したものと考えられる。和田村は昭和二十九年、松本市に編入する以前、東筑摩郡に所属しており、現在の松本市西部と波田町の間に位置した豊かな水田地帯である。図録の地図によると、杜夫の採集ルートの始点が「島々」とあるが、島々は杜夫が昭和二十年七月に、与曾井豊の案内で松本に来て初めて上高地を訪れた際の最初の宿泊地で、当時は東筑摩郡波田町前渕にあり、松本電鉄上高地線の最終駅であった。和田村はその島々から松本側に寄った地域であり、上高地行に慣れてきた杜夫はその地に宿泊し、島々から上高地に向かったものと考えられる。

本詩は全三連構成の口語自由詩である。第一連は「げんげの花畑」や田起こし、代掻きの田園風景、水田の水面に映る夕日影等を描き、のどかな夕暮れの山村を表現している。第二連は「和田村のものしずかなゆうべ」にはじまり、「名も知らぬ羽虫」や「白い小さな兎の子」との出会いに童心を蘇らせ無心に見入っている杜夫が描かれる。第三連は、「春やまの話」「新緑の話」に胸を躍らせ、昆虫や上高地の自然に夢を抱いている杜夫の内面が描かれる。

こうした構成から、「山村にて」の主題は、「上高地へ昆虫採集に向かおうと、春たけなわの和田村に逗留し、のどかな田園の夕暮れどきの情景や宿屋で出会った羽虫や白い小さな兎の子等を見つめながら、新緑の上高地や昆虫たちとの出会いに夢をふくらませ、静かに思いを寄せている杜夫」と捉えることができる。

（補記）

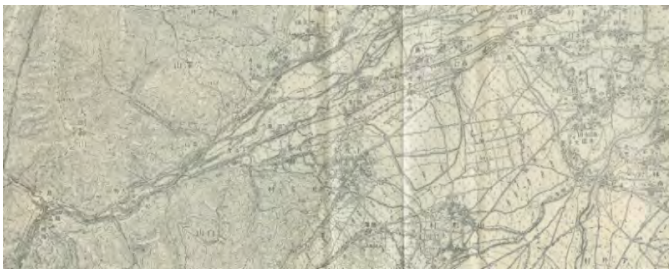
島々谷から徳本峠を越えて上高地に向かう登山道には、清流の沢筋に沿って橋を渡りながら登っていくところがある。本詩創作とほぼ同時期に詠まれた短歌「やま水」連作六首には、この上高地行の際に詠まれたと考えられる作品がある。いずれも「六月集」（『寂光』）に収められており、一篇と合わせて理解することができる。「山峡」に続き、杜夫のナイーブな抒情性が描かれた作品となっている

沈黙の人の見つらむ山水のその源（みなもと）を尋ねゆくこころ

古（いにし）へ人心にもちてきたりたるわが目に沁みて光るやま水

まながなしくひとり岩かげに入りにけり絶ゆることなき山の水の音

（『寂光』PP.144-145）



上の地図は筆者所有の「松本　1/50000 地形圖高山 3 號」（大正 7 年 2 月 28 日発行、大日本帝國陸地測量部）のトリミングデジタル写真である。昭和 29 年松本市編入以前の東筑摩郡和田村（中央右側）と島々（左端）の位置、和田村周辺の水田地帯等を確認することができる。

（4）随筆「六脚蟲の世界」

杜夫は昭和二十二年（松本高校三年）九月に、再刊された校友会会誌「山脈」に「六脚蟲の世界」を発表した。一篇はその後単行本未収録であったが、「マンボウすくらっぷ―単行本未収録エッセイほか」[19]、『マンボウ思い出の昆虫記―虫と山と信州―』等に収録された。以下に、創作の背景、作品の構成、主題と論考を進めていく。（ページ数は注（5）による）

一篇執筆当時の杜夫は、同年十月の父茂吉との進路をめぐってのやりとりの直前で、未だ動物学志望を胸に、ファーブルに憧れを抱いていた頃の作品である。わずか三ページにも満たない小篇であるが、生来虫好きの杜夫が、はかない虫達の命に自らの命を重ね、愛しみ、虫達とその詩を描きながら生きていきたいと、自らの進路に対する想いを表している。

冒頭には、杜夫が文学に覚醒していくきっかけとなった茂吉の『寒雲』より当時の杜夫が好んでいた次の一首を置き、はかなく生きる昆虫の世界に誘おうとする杜夫の意図が窺える。

冬枯れし木立（こだち）の中（なか）はものも居ず幽（かそ）けくもあるか落葉（おちば）うごく音（おと）

（茂吉）

一首は「昭和十二年、一月雑歌」（『寒雲』）の十一首中の末尾に置かれている。杜夫にとって昭和十二年（杜夫十歳、小学校四年）は、夏休みの宿題で初めて昆虫採集をし、標本を制作した年であることから、執筆の際、杜夫は少年の頃の昆虫との出会いを想起しながら執筆したと考えられる。一篇は杜夫の昆虫との体験が凡そ四つに分けて構成されている。

一つ目は、杜夫が十二月の雑木林の日だまりの中に歩み入った際に注意深く観察した体験である。ひっそりと浮んでいるヒラタアブ、産卵後も辛うじて生き残っているクヌギカメムシの母親、クリノオオアブラムシの産卵と寄生蜂の生態など、「我々の視野から除外された空間」（P.38）に生きる昆虫の世界が克明に描かれる。

二つ目は、王ヶ鼻山頂付近の六月の草原の「かそかな昆虫の世界」（P.38）に観られる生存競争を描いている。王ヶ鼻山頂、美ヶ原方面は松本市の東方に位置し、松本を抱くようにたたなづく峰々である。六月の末頃、キスジコガネの大群に群がって捕える「吸血鬼のムシヒキアブ」（P.38）の生態、子供の食料となる青虫を運んでいる途中でカマキリに捕えられてしまうジガバチの親をはじめ、イタヤハマキチョッキリ・アシナガオトシブミ等、昆虫に観られる「本能

の神秘」（P.38）に目を向けている。本章第三節第一項に採集地を整理したように、杜夫は王ヶ鼻を三回採集に訪れている。本文六月末の観察内容は一回目の採集体験をもとにしていると考えられる。

三つ目は、少年時代に青山墓地で越冬中のトビイロケアリの雌を採集した思い出と結びつく狩猟蜂（クララギングチバチ）の観察体験である。常に単独で生活している狩猟蜂類の寂しく、然し興味深い生態を描いている。

四つ目は、「松本市外」（P.39）で出会った珍種のオオルリシジミ、更には北アルプスで出会った厳しい自然環境を生き抜くクモマツマキチョウ・コヒオドシ・ミヤマシロチョウ等、貴重な高山蝶が描かれる。

そして文末に、「我々の前には夫々の一本の道が続いている。私は虫たちとその奏でる詩を相手に、その寂しい道をどこまでも歩み続けねばならぬ」（傍点引用者）（P.39）と結ばれているが、茂吉の次の「一本道」冒頭の一首を連想させる。

あかあかと一本（いつぽん）の道（みち）とほりたりたまきはる我（わ）が命（いのち）なりけり

（『あらたま』）

杜夫は、冒頭と文末に当時尊敬していた父茂吉への想いを寄せながら、これまでの昆虫採集を振り返り、将来の夢や進路を想い描いていたと推察する。

「六脚蟲の世界」の主題は、「これまでの昆虫採集や観察から興味を抱いた昆虫の世界を具体的に示し、はかない昆虫たちの命に共感しながら見つめ、愛し、そこに詩を見出していこうとする杜夫の決意」と解釈できる。

4　精神的思春期

（1）読書への没頭

茂吉短歌によって文学愛好者に変じた杜夫は、昭和二十年九月二十日、学校が再開され、「思誠寮中寮二号」に入寮となった。杜夫は、哲学や文学に対して情熱的な上級生の「面妖な言葉」に感服し、憧れを抱きつつ「精神面での胎動」を体験していくこととなる。杜夫は「自分がこの世の偉大な書物をちっとも読んでいないことにびっくりし、闇雲に読みはじめた」（全集第十三巻 P.22）と記している。『どくとるマンボウ青春記』には友人に借りた本や「図書室」[19]の本を「毎月二、三十冊も読むようになり」（全集第十三巻 P.22）とある。当時の松本高校思誠寮寮生の読書は学校の図書館もさることながら、様々な分野の膨大な本を所蔵していた身近な寮の「図書室」であり、そこは、あたかも学問のサロンのようであったと推察される。杜夫も「小説などは友人から借りたもの、図書室のものだけを読み、自分では一冊も買わなかった」（全集第十三巻 P.72）と回想している。更に、杜夫は当時の読書を振り返り、以下のように述べている。

当時は、自分がなにも知らないという不安解消のためもあったが、より多くほとんど目的なしに読んだ。それが面白かったから読み、素晴らしかったから読み、何が何やらわからないから驚嘆して読んだのだ。空腹だったから雑草まで食べたように、精神の飢餓が貪婪に活字を求めたのである。

（全集第十三巻 P.83）

杜夫が「精神の飢餓」とまで言うその読書熱は、「焼け残った神田の大橋図書館へ通った」（全集第十三巻 P.28）や、記念祭ファイヤー・ストーム圧巻の涙の後に「これからモリモリ本を読むことを誓う」（傍点引用者、全集第十三巻 P.51）、更には昭和二十一年大石田の聴禽書屋の二階で「またかなりの本を読んだ」（全集第十三巻 P.41）等の記述からも見えてくる。

こうして杜夫が高校時代に出会っていった著者は、『どくとるマンボウ青春記』を見るだけでも、齋藤茂吉、ゲーテ、河合栄治郎、カント、ジョージ・エリオット、サミュエル・バトラー、西田幾多郎、阿部次郎、倉田百三、ニーチェ、シェイクスピア、ドストエフスキイ、夏目漱石、ウィリアム・ブレイク、有島武郎、キルケゴール、トーマス・マン、リルケ、シュティフター、プラトン、牧野富太郎、高村光太郎、萩原朔太郎、中原中也、三好達治、大手拓次、吉川英治、トルストイ、ホールデン、ヴァレリー、バーナード・ショウ、ファーブル、モンテニュ等々を列挙することができる。また、「Ⅳ「ともしび」時代」（『壮年茂吉』）には芥川龍之介について、「私が旧制高校へ入って理科少年から文学青年に変貌したとき、もっとも好きだった日本人作家が芥川であった。寮の図書室にあった全集というものを生れて初めて読んだのを覚えている」（P.225）と記している。

以上のように、精神的思春期を迎えていた松本時代の杜夫には、ひたすら活字を求めた時期があった。先の著者群の中でも、特にトーマス・マンやリルケについてはよく知られるところである。その出会いはいかなるもので、杜夫はどう受け止めていったのであろうか、以下に概観する。

（2）トーマス・マン、リルケとの出会い

杜夫とトーマス・マン（Thomas Mann,1875-1955）、リルケ（Rainer Maria Rilke,1875-1926）等との出会いについては、「瘋癲寮の終末」（『どくとるマンボウ青春記』）に詳しく語られ、南森孚「北杜夫とトーマス・マン」[20]にも論考されている。先ずは、全集から出会いの場面を確認し、その享受の情況を考察していく。

昭和二十一年三月（松本高校二学年進級試験合格後）、杜夫は校友会の新旧委員交代の席で二人の教授と日本酒を飲み「談合」していた。上級生の「パトス」が熱く主張する姿を目にした杜夫は「パトス氏たちは学生の自治を主張し、旧弊な教授はそれを阻止せんとしているのだ」（全集第十三巻 P.58）と思い込み、二人の教授の頭を殴ってしまう。その一人がドイツ語の望月市恵であった。杜夫は翌日謝罪、後日この暴力事件がきっかけとなり、親しく自宅訪問を許されるようになっていった。またドイツ語の授業でもマンやリルケについての話を聞く機会が多くなっていった。杜夫にとってこの出会いは、その後仙台での『幽霊』等の執筆につながっていく「運命的な出逢いの萌芽」（全集第十三巻 P.60）であった。次に、マンとリルケそれぞれの出会いの詳細を考察していくとする。

杜夫が最初に惹かれたマンの作品は初期短編小説『トニオ・クレーゲル』であったことは周知であるが、辻邦生との対談[21]に杜夫は以下のように語っている。

> マンで最初に惹かれたのは、やはり『トニオ・クレーゲル』で、これも、はっきり言うと大学に入ってから熱中したと思うな。ぼくは、マンの理性的・批評家的世界とは反対でしょ。極端だから惹かれたんですよ。（傍点引用者）　（P.28）

杜夫は『魔の山』『ブッデンブローク家の人々』についても「それを読んだのは、大学に入ってからだよ」（P.27）と同対談では語っている。しかし、「『魔の山』の思い出」[22]には松本高校の思い出として、「ついには私までが読んだ（中略）並々ならぬ感銘を受けた。その感動はずいぶんと深く私の内部に根をおろしたもののように思われる」（全集第十五巻P.80）とある。更に、大学までの通算で「『魔の山』も五回くらいは読んでいた筈であった」（全集第十五巻P.81）とある。これらから考えるに、辻との対談では辻に対する謙遜からか、「大学に入ってから」と韜晦的に語ってはいるが、高校時代に多少の大変さを感じながらも、既に『魔の山』も読んでおり、心の深い部分に刻まれた感動が仙台の残り四回ほどの読みにつながっていったと解釈することができる。実際のところ、東北大学入学当時杜夫は松本を懐かしみ、仙台から何度か松本を訪れているが、「いよいよものを書きだす」の以下の記述から、マンに対する杜夫の意識は松本から仙台へと連続していたことが確認できる。

私は松本へ行くたびに、松高の図書館からマンの小説を借り、そこここの好きな箇所を、自分の本の余白にびっしりと筆写した。マンの自伝である『人生略図』の載っている雑誌を望月先生から借り、夏休みの箱根滞在中に、苦労をして辞書をひきひき、毎日一、二ページずつ読んでいた。

（全集第十三巻P.131）

以上、松本時代の杜夫はマンと出会い『トニオ・クレーゲル』や『魔の山』等に感動し、心の深部に残るような文学的体験もあったと解することができる。また、『どくとるマンボウ青春記』の「瘋癲寮の終末」には『魔の山』の舞台が「結核療養所」であることを受けて「高校の寮とは、小規模な一種の『魔の山』ともいえないであろうか」（全集第十三巻P.61）と回想し、パロディーとして描いた箇所がある。そして、仙台での「いよいよものを書きだす」には、「私がマンに心酔したのは、結局、自分のなかにないものに惹かれたのであろう」（全集第十三巻P.133）と記している。当時の杜夫は、マンには自分には無いものがあり、かえって興味が湧き、好奇心や憧れ等がマンに惹かれる心情になっていったとも考えられる。見方を変えると、自己の認識領域を拡大しようとする志向が松本時代の杜夫の内面には在ったと推察できる。このことはマンのみならず、本章第四節第一項の「読書への没頭」とも関連し、旺盛な好奇心や憧れとともに自己の精神的領域を拡大していこうとする青年期の杜夫の特徴的な一様相になっているとも言える。

さて、当時のリルケの享受もこうした様相の一つとして考えることができよう。しかし、リルケに関しては『どくとるマンボウ青春記』の高校時代の記述では先の出会いの他に記された箇所が見当たらず、大学時代、箱根山荘[23]の思い出に描かれた箇所がある。そこで、本論考では大学時代の情況から高校時代を推し量りつつ考察を進めていく。

杜夫は茂吉晩年の箱根滞在の際、三度父茂吉の身の回りの世話をしており、当時の様子は『どくとるマンボウ青春記』の他に『壮年茂吉』『茂吉晩年』等にも描かれている。「Ⅱつきかげ」時代」（『茂吉晩年』）の杜夫の日記抄及び茂吉全集の日記から、杜夫の滞在は時系列で以下のように整理できる。

一度目　昭和二十三年七月二十六日～八月三十日

（大学一年の夏休み）

二度目　昭和二十四年七月二十七日～九月四日

（大学二年の夏休み）

三度目　昭和二十五年七月二十四日～九月十六日

（大学三年の夏休み）

茂吉の肉体的な衰えにより、昭和二十五年が最後の箱根滞在となった。「Ⅰ　つゆじも時代」（『壮年茂吉』）の一度目の滞在時の出来事に目を向けてみたい。当時「医学の勉強以外の本を読むのを禁じていた」（P.58）茂吉であったが、杜夫が望月市恵から借りたマンの自伝「人生略図」を読んでいるところを見つけても、杜夫がマンの話をしても「毛唐の中にはなかなか偉い奴がいる」と言って「珍しく怒らなかった」という思い出が語られる。そして直後にリルケについて以下のように書かれている。

そこで私はつい調子に乗り、望月市恵先生からの耳学問を述べ立てた。

「リルケは、いかなる主観も、この世には必ずそれを表す客体があると言っています」

すると父は、「ほう、お前は大したことを知っているな」と、一旦は感服したが、たちまちにして声を荒げた。

「一体、お前はどこからそんなことを覚えてきたんだ！」私は身をこわばらせ（中略）沈黙の中に逃げ込んだ。

（傍点引用者）（PP.58-59）

この時、杜夫はなぜ敢えてマンの次にリルケについて茂吉に聞いてみようと思ったのであろうか。

昭和二十三年は茂吉に内緒で杜夫が「文学集団」（ペンネーム「北宗夫」）へ詩の投稿を始めた時期であり、その二年後の昭和二十五年には『幽霊』執筆を開始している。杜夫は最晩年に「恐ろしい娘によるリハビリと私の認知症」[24]でさりげなく以下のように『幽霊』執筆の舞台裏を吐露している。

リルケといえば私の最初の長編『幽霊』は、かなりリルケの『マルテの手記』の影響を受けているのである。（傍点引用者）（P.101）

これまでの『幽霊』の論考を見ると、辻邦生は「解説」[25]において『幽霊』は、当時の杜夫の内面世界が完全に開花した初期作品群における主峰に位置する作品であることを指摘した上で、当時の学友としての目線でマンとの影響関係について、「北杜夫は昆虫採集や登山に熱中したようにマンに惑溺したのであり、ちょうどマンその人がショーペンハウエルに惑溺した体験を『ブッデンブローク家の人びと』のなかに描きだしたように、彼もまた『幽霊』のなかでマン体験を描くのである」（P.208）と述べ、マンの影が「マンふうの批評的分析的な語句のなかに見出される」（P.208）と指摘している。

確かに、辻邦生が述べるように杜夫の『幽霊』の叙述は、既にマンが無意識的なまでに消化されていた状況であったと推察することも可能であろう。実際、杜夫は「形容詞とか副詞をいくつも並べるというのは、マンの文体の影響です」（「木精」（P.150）、奥野健男『北杜夫の文学世界』（中央公論社、昭53・2・10）とも述べている。しかし、『幽霊』については、奥野健男との対談で、杜夫自ら

「『幽霊』『木精』は別にトーマス・マンを下敷きにしたという作品ではないですね」[26]（P.83）（傍点引用者）と語っている。

また、「傲慢と韜晦」では「私は視覚型の作家であるが、『幽霊』はその中で数少ない音楽性をおびている。記憶のよみがえりというテーマは目新しいものではなく、当時私はフロイトはよんだが、プルーストはよまなかった。『失われた時を求めて』の新しい翻訳が出始めていて、それをよみたいがよむのがこわいという心境であった。結局、小説を書き終えるまで、よむことをしなかった」（全集第十四巻 PP.297-298）[27]と述べている。

以上の点から、『幽霊』の解釈ではマンやプルーストの影響よりもリルケの『マルテの手記』との影響を検証し、杜夫のリルケ像を見ていく必要があると指摘しておく。今後稿を改めて論考していきたい。

さて、昭和二十五年『幽霊』執筆開始以前の杜夫の関心は、短篇と詩であった。『幽霊』より前の初期短篇（昭和24～26）は『幽霊』に集大成されたと『牧神の午後』の「あとがき」にある。一方詩については、昭和二十三年の「文学集団」投稿の後、昭和二十四年には「詩学」へも投稿している。そして、それらの詩の中には、松本時代を題材にした作品も含まれている。これらをもとに類推すると、当時詩作に熱心であった杜夫が、昭和二十三年に箱根の山荘で茂吉に聞いてみたかったことは、茂吉のリルケ観であったろうと推察する。茂吉が先のリルケの言葉を短歌詠草ではどう受け止めるか聞き、また茂吉の意見を自らの詩の創作に生かしていこうとしていたからとも考えられる。

先の「長編『幽霊』は、かなりリルケの『マルテの手記』の影響を受けている」という杜夫の言葉をもとに、高校時代に遡ると、昭和二十一年の望月市恵との出会いによるリルケ体験は、それ以降、精神的水面下において短歌や詩の創作、昭和二十二年箱根山荘の質問、初期短篇、更には『幽霊』執筆へと脈々とつながっていたと考えられる。当時杜夫は、高村光太郎らの日本近代詩も好んで読んでおり、リルケの詩にも目を向けながら創作していたであろうと考える。

次の第三項では、茂吉の短歌及び光太郎、リルケらの詩をどのように享受していったかを、三者の文学観の相関関係に目を向けながら考察を進めていくとする。

（3）精神的萌芽―茂吉、光太郎、リルケ、ロダン―

「其の一」第三章では、杜夫が文学に覚醒していく契機となった茂吉の自選歌集『朝の螢』の代表歌「草づたふ朝の螢よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ」（『あらたま』）に同調する叙述を『神々の消えた土地』に指摘し、杜夫が「大自然と自分が一体である」という自然観を見出し、対象となる自然や更には茂吉に対しても「係恋」の情を抱くようになっていったと考察した。また、第四章では、『寂光』に見られる「「くれなゐの茂吉」の陰影」について、「寂し」「悲し」「くれなゐ」等の関連語句を検証しながら、杜夫が当時茂吉の初期歌集『赤光』『あらたま』の歌を中心に、その「寂寥」「悲哀」「悲傷感」等に共感しながら享受していったところを明らかにした。「実相観入」に象徴されるように生命の表現を「写生」に込めた茂吉にとってそれは、生きるが故の「寂寥」「悲哀」であり、生きとし生けるものの命のはかなさの詠嘆であった。これは、父茂吉のＤＮＡから受け継いだといっても過言ではないほどの松本時代の杜夫にとって重要な様相の一つであると考えるが、この「寂寥」「悲哀」を伴いつつ対象と自分が一体となるべく向き

合っていくという自然観は、松本時代に様々な文学や哲学と出会っていく中で、一層拡大深化していったものと考えられる。本考察ではまず、特にこの様相に勢いをつけさせ、増大させていったと考えられる人物として、光太郎、リルケとの出会いについて確認し、考察しておくとする。

杜夫の光太郎享受については、「茂吉と光太郎」に次のように書かれている。

茂吉のあとにつづいて、私は高村光太郎の詩を愛唱した。はじめはやはり『智恵子抄』の中でも甘いものに惹かれた。次第に『道程』の力強いものが好きになり、殊に戦後、光太郎の詩が雑誌に載りだしたころは、その一篇のために一冊の雑誌を買ったりした。（傍点引用者）　（全集第十五巻P.99）

この「甘いもの」から「力強いもの」への変化を、当時の杜夫の精神面に寄り添って換言すれば、「ナイーブで感傷的なもの」から、「生への力強い意志」へと変化していったと言うことができよう。

昭和二十二年、松本高校二年生の三学期、光太郎ら日本近代詩を耽読しながら、詩作も始めた杜夫は前年十二月の「恋人よ」に続いて寮歌歌詞「人の世の」、「思誠」投稿短歌「山峡」連作十首等を発表している。「人の世の」は本論第二章第二節「寮歌」で述べたように、青年のナイーブで感傷的な心を象徴する作品であった。また、「山峡」の連作十首はいずれも『寂光』収録の歌であり、茂吉に歌稿を送り○を貰った時期の作品である。「山峡」には「くれなゐの茂吉」の陰影」ともいえる「都の灯」「赤き表紙の本」「灯火」「心かなしも」「入日」をはじめ、「淡々と」「かそけし」「虚しき」等、相関的な叙述を見出すことができる。しかし、やがて杜夫は光太郎の「冬が来た」などに惹かれ、厳冬の松本の地を「この語句を呟きながら歩いたものである」（「役立たずの日記のこと」、全集第十三巻P.73）と回想している。そこには、感傷的な一面を持ちながらも、勇気をもって対象に向かい、挑み飛び込んでいくような力強い「生への意志」や自己への鼓舞が芽生えてきていると解することができる。こうした杜夫はやがて大学に入ってから「成長」「細菌教室」「漂流」「絶縁状」「出発」等、精神的に新たな出発へと踏み出すような詩を書いていく。

では、リルケはどのように享受されていったのであろうか。望月市恵からの耳学問の具体的内容は知る由もないが、ここではまず、当時杜夫が惹かれたリルケの文学世界について概観し、杜夫の創作活動との関連に目を向けながら、考察を進めていくとする。

先の杜夫の『幽霊』執筆に関わる吐露にあるリルケの小説『マルテの手記』は、二十世紀初頭のパリでリルケが不安と苦悩の日々を過ごした際の散文形式の手記であり、その後、詩人へと自己形成を遂げていく転機となった自己内省的な作品であると言われている。

高安國世は「リルケの生涯」[28]でその生涯を四つの時期に分けて捉えている。その要点は以下の通りである。　（PP.271-280）

1　一八七五～一八九六　誕生から陸軍幼年学校、ミュンヘン大学入学まで。

2　一八九七～一九〇二　ミュンヘン、ベルリン等に住み、ヤコブセンの文学を知り、二度ロシア旅行を行い、ヴォルプスヴェーデでドイツ印象派画家たちと識り合う。その中の女流彫

刻家クララ・ヴェストホッフと結婚し、子供が出来、妻子とわかれてパリへ出る。一九〇二年九月まで。

3　一九〇二～一九一〇　パリ時代、ロダン、セザンヌの影響の下に「新詩集」を書き、「マルテの手記」を書き上げるまで。

4　一九一一～一九二六　「後期詩集」「ドゥイノの悲歌」「オルフォイスのソネット」の時期。

高安は「一八九七年、ミュンヘンに来てから、リルケの本當の文學的開眼があつたと言つてよい」（P.273）と述べ、デンマークの詩人ヤコブセン（Jens Peter Jacobsen,1847-1885）から、リルケが学んだことは「その自然を見る眼である。深い眼光と全幅の愛とを以て事物を觀察すること、觀察したものを深い沈默と忘却の中で成熟せしめること等」（P.273）（傍点引用者）と指摘している。また、「リルケ年譜」[29]により、その後のリルケの詳細を見ると、ロダン（Auguste Rodin,1840-1917）の影響も確認できる。二度のロシア旅行（1899.1900）の後、彫刻家クララ・ヴェストホフと結婚する（1901.4.29）。クララはパリでロダンの教えを受けており、リルケは彼女からロダンに関心を抱くようになる。リルケはその後、リヒャルト・ムッタアからロダン論の執筆を依頼され（1902）、単身パリに赴く（1902.8.28）。そして、その翌月（9.1）に初めてロダンを訪ねている。こうした中でリルケがロダンの芸術や生き方に深く影響を受けていったことは広く知られるところである。

リルケがロダン体験から得たものは「手仕事」（Handwerk）であったと言われるが、リルケは「講演」（「第二部　講演　一九〇七年」、「Iロダン」[30]でもくり返し述べている。

一種の手仕事が成立するのです。見きわめもつかず終りもなく、「たえずまだまなぶ」ことを目あてとしているのです。ではこのような仕事にふさわしい忍耐というものはどこにあったのでしょうか。（『リルケ全集　第5巻』（P.73））

この問いの答えに、リルケは「労作者の愛の中」の「愛する人」であると述べている。この「愛する人」（Liedender）は「愛される人」（Geliebter）ではない。リルケにとっては常に「愛する」ことが「愛される」ことより大切であった。「愛」とは「愛する」（能動的な意志、引用者記）にこそあるとリルケは認識していくのであった。

ここで、高安の前掲著「初期詩集」の次のリルケ詩に目を向けてみたい。

私の生はどこまで届いているのだろう、
誰か私に言うことが出來るだろうか。
嵐の中をも私はさまよつてはいないだろうか、
波となって私は池に住んではいないだろうか、
そうして私自身、あの、春の寒さに慄えている
蒼ざめた白樺の樹ではないだろうか。　（P.26）

高安はこの詩について、「見るものと見られる物とが深くかかわり合つて一つになるリルケ的世界を告知している」（P.27）と、ヤコブセンの影響を指摘し、リルケの「die einige Harmonie」（「統一ある

調和）について、「自我を解き放つて萬象と一つになつて、萬象のリズムにつれて揺れ動くこと、これが若い詩人の念願だつたし、形も心も、色も匂いも、すべてが不思議に觸れ合い照應し合うのが、新しい詩の欲求であつた。それは詩人の魂の中、内面空間で成就されることであつた。そのような思想は、後年のリルケに再び決定的なものとなつてあらわれて來る」（P.27）（傍点引用者）と述べている。

このヤコブセンからの影響、「自我を解き放つて萬象と一つになつて、萬象のリズムにつれて揺れ動くこと」は、リルケの「汎神論的な感情」（P.28）の自覚であると高安は指摘している。

リルケはこうした「初期詩集」の後、ロダンの影響を受け、やがて『マルテの手記』を執筆していくこととなるが、ここでリルケの晩年にも目を向けておきたい。塚越敏の「Ⅲ　「物の見へたる光」（芭蕉俳諧）」（『創造の瞬間　リルケとプルースト』みすず書房、平成12・5・25）には、リルケが一九二〇年発行の「エヌ・エル・エフ」（九月号）のクーシュー（Paul-Louis Couchoud）の紹介により、日本の俳諧と出会い、芭蕉の俳諧芸術にも関心を向けていったことが論じられている。その中で、塚越は、「芭蕉の芸術論（俳論）がいかにリルケの芸術論と軌を一にしているか」（P.108）と述べ、「蕉風俳論こそ、リルケの形而上学的芸術論と合致したものと言いうる」（P.108）と論考している。

更に、芭蕉に影響を与えた荘子との関連においても、リルケの生き方と一致している点を以下のように述べている。

荘子の万物斉同（せいどう）の説は、「斉物論篇」にあって、万物斉同の境地とは、生死の対立が消え、すべてがそのまま肯定される絶対の世界、実在界である、と言われている。リルケのいう「否定のないどころでもないところ」Nirgendsohne Nichts（『ドゥイノの悲歌』第八悲歌）である。人間の世界とはちがって、絶対無差別の、対立のない世界、そこで人為のない、ありのままの自然を生きることを荘子は願ったのだった。有限の絶対差別の人為を去って、生と死が一つとなり、物皆自得する自然（造化）を生きることが、荘子の願いであった。リルケもこうした絶対の世界を狙い、意識の表象作用による相対化を極力否定して、（物皆自得している）事物存在の確立を願った。（P.109）

また、「リルケの『オルフォイスへのソネット』で最終的に歌っている「変身」（Verwandlung）は、まさに荘子の「物化」とおなじである」（P.110）と述べ、芭蕉の俳諧における、「主客合一」についても、「この凝視が対象のなかに入り込み（観入）、その凝視によってその対象の本質が一瞬「物の実相」（「物の見へたる光」）として把握され」（P.115）俳諧が生まれるとし、「リルケのいう芸術事物とは、「物の実相」を芸術的に事物化したもの」（P.115）と論じている。

以上のように、リルケにおけるヤコブセンからの「自我を解き放つて萬象と一つになつて」、蕉風俳諧からの瞬間の「主客合一」等を概観すると、茂吉の「実相観入して自然自己一元の生を写す」との共通の視点を見出すことができる。杜夫がリルケに惹かれていった理由の一つには、茂吉とリルケとのこうした芸術観の類似性もあったと考えられる。実際、杜夫による茂吉のリルケ観の詮索は箱根での質問の他に、「Ⅱ「白桃」「暁紅」時代」（『茂吉彷徨』）にも、茂吉が「田中隆尚さんとはもっと学問的に話し、時に教えを乞うている。リルケの話[31]もときどきしている」（P.129）（傍点引用者）ともあり、

杜夫のリルケに対する興味関心の高さが窺える。

松本時代の杜夫は茂吉の短歌により文学に覚醒し、リルケとも出会っていった。萬象と一体となるという瞬間の姿に目覚めていくリルケの詩に惹かれ、茂吉の「実相観入」と類似するその芸術観に共感しながらリルケ文学を享受し、「生への意志」を実感し、徐々に精神的萌芽を体験しつつ創作していったものと考えられる。

さて、ここで光太郎、リルケ、茂吉の三者に共通するロダンの芸術思想についても指摘しておきたい。

光太郎は、東京美術学校の学生時代に、ロダンを知って強い印象を受け、フランス留学中（1908-1909）に実際にロダンの作品と出会った。帰国後は『ロダンの言葉』[32]（1916）や評伝『オオギュスト・ロダン』（1924）を出版し、ロダンを日本に紹介するなど、光太郎のロダンからの強い影響は周知のことである。以下に「ロダンの手記」の「断片」（『ロダンの言葉』）よりロダンの自然観が表れている主な言葉を列挙する。

○　どんなモデルにも其處に自然全體がある。物の見える眼は其を發見し又其を追及する。實に遠くまで！　其處には殊に大抵の者の眼に見えないものがある。測り知られない深さ、生命の奥底だ。優雅の上に、優美。優美の上に、肉づけ。だがそんな事は皆言葉の及ぶところでない。人は肉づけが軟かいといふ。が其は力强くやはらかいのだ。言葉が足らない……。　（PP.116-117）

○　藝術は此の自然の大宗教の調和ある儀式である。　（P.127）

○　自然は決してやり損はない。自然はいつでも傑作を作る。此こそわれわれの大きな唯一の何につけてもの學校だ。他の學校は皆本能も天才も無いものの爲めに出來たものだ！　（P.142）

○　藝術に於て、人は何にも創造しない！　自分自身の氣質に從つて自然を通釋する。それだけだ！　（P.143）

ところで、リルケがロダンから学んだことの一つは、先に述べた「手仕事」であり、ここでは、「愛」とは能動的な「愛する」にこそあるというリルケの認識に留めておくとする。

次に、茂吉とロダンとの接点について、ここでは二点ほど指摘しておきたい。

一点目は、「写生」を旨とする正岡子規やアララギ派の短歌からの視点である。子規没後、伊藤左千夫と長塚節の間に起こった「主観」に関する「写生をめぐる論争」は周知であるが、茂吉はその論争後「短歌に於ける寫生の説」（「アララギ」（大正9・4～大正10・1）、『齋藤茂吉全集第九巻』「後記」より（P.897））の「第四「短歌と寫生」一家言」に、広く知られるところの「写生」の定義を以下のように述べている。

實相に觀入して自然・自己一元の生を寫す。これが短歌上の寫生である。この實相は、西洋語で云へば、例へば das Reale ぐらゐに取ればいい。現實の相などと碎いて云つてもいい。自然はロダンなどが生涯遜つてそして力强く云つたあの意味でもいい。この自然の大體の意味を味ふのに和辻氏の文章が有益である。『私はここで自然の語を限定して置く必要を感ずる。ここに用ひる自然は人生と對立せしめた意味の、或いは精神・文化などに對立せしめた意味の哲學的用語ではない。むしろ生（せい）と同義にさへ解せらる所の（ロダンが好んで用ふる所の）人生自然全體を包括した、我々の對象の世界の名である。（我々の省察

の對象となる限り我々自身をも含んでゐる）それは吾々の感覺に訴へる總ての要素を含むと共に、またその奥に活躍してゐる生そのものをも含んでゐる』かう和辻氏は云ふ。予の謂ふ意味の自然もそれでいい。（『齋藤茂吉全集第九巻』（PP.804-805））（傍点は原文では傍。傍点、文字表記は一部現代表記、（　）は原文割注）

この「写生」の定義に意味づけた対象となる「自然」は、表現者と距離を隔てた「自然」ではなく、表現者自身を含む「人生自然全體」を包括するというロダンに共鳴する「自然」であることが理解できる。また、先に引用した光太郎の『ロダンの言葉』にある「自然」は、茂吉の「寫生の説」における「自然・自己一元の生」の「自然」とほぼ同義であると解される。茂吉短歌の原点とも言える「短歌に於ける寫生の説」を構築していく初期段階で、ロダンと符合するような明確な接点を指摘できる。

二点目は、随筆「ロダン、レムブラント（ジムメル抄）」（『齋藤茂吉全集　第七巻』）にジムメルのロダン論とレムブラント論を比較しながら、ロダンの造塑形態について考察している点である。そこには、「直接の生に本づくことを重んずる」（P.374）等の意見を記している。茂吉全集第七巻「後記」によると、本随筆は、「未発表の自筆原稿に據つた」とあり、「筆者（茂吉のこと、引用者注）の日記によれば、昭和二十年二月七日にジムメルのロダン及びレムブラントを讀み、翌八日に『レムブラント論を抄記した』とある」（P.864）と記されている。杜夫の「Ⅰ「つゆじも」時代」（『壮年茂吉』）によると、茂吉の「実相観入」は「アララギ」（大正九年四月号）の「短歌に於ける寫生の説（一）」の発表以来、三段階で完成されていったと考察されている。最終段階では「昭和二十年発行の「文学直路」の中の「観入という語について」（昭和九年一月執筆）という文章で、「独逸語にはHineinschauenというやうな語もあり、何かさういふところから暗指を得て、私は「観入」といふ熟語を造つたのであつた」と初めて明かしている」（PP.55-56）と記している。つまり、茂吉がロダンについて書いた本随筆の執筆時期は「実相観入」の最終完成段階に意味づけられていった頃と重なっており、茂吉のロダン観が、「寫生の説」の最終段階における一つの拠りどころとなった可能性もあると考えられる。

独逸語「Hineinschauen」（日常語としては「のぞき込む」の意）は、「hin」（向こうへ）・「ein」（中へ）の接頭語が「schauen」（見る）に結合した形である。そこには、「自らを対象の方向に向け、その中に入り見る」と「観入」の意味が読み取れる。

以上、松本時代の杜夫はこうしたロダン芸術にもつながっていくような光太郎やリルケ、そして茂吉の文学観に共鳴しながら精神を大きく萌芽させていったものと考える。このようなダイナミックな精神的萌芽を当時の杜夫の一様相として指摘しておきたい。

（補記）

昭和二十三年、杜夫が仙台に行って間もない頃の日記（『或る青春の日記』）には「リルケ」「ロダン」「光太郎」等についての記述が比較的多く、特に四月に松本を訪れた際の日記に顕著な傾向が見られる。「四月八日」には「そしてリルケの言葉をかみしめていた（中略）そしてまた何となく僕はリルケとつぶやく」（P.12）とある。「四月十日」には「リルケについて。「運命を持たぬことが僕の運命です」と言った詩人。彼は生活が運命より偉大なる如くロダンから仕事を

学んだ」（P.14）と記し、その日記の結びには「一八七五年十二月四日、プラーグに生れ、一九二六年十二月二十九日午前五時に死んだこのもっとも純粋な詩人リルケを、僕は心から思うのである。慕うのである」（P.15）とある。また、翌日「四月十一日」の日記には、「今、リルケ、光太郎を思うは力である」（PP.17–18）とも書かれており、松本を訪れた際の杜夫が、「リルケ」「光太郎」「ロダン」等を想起し、自らの存在を確認していたと理解できる。

5　夢の断念

（1）茂吉の書簡

昭和二十二年（松本高校三年、杜夫二十歳）の十月、杜夫にとってそれまでの人生の転換を迫られるような衝撃的な出来事が起こる。それは、虫好きで父茂吉の短歌により文学に覚醒した杜夫の、ファーブルのような昆虫学と文学を融合した道を歩みたいという夢が、茂吉の猛反対にあい、断念せざるを得なくなったという出来事であった。一体、どのように杜夫は夢を断念していったのであろうか。杜夫自身はこの出来事について「死」[33]に以下のように記している。

> 私は生涯に一度、自分の主張を通そうとして、手紙で（面と向ったらとても言えたものではない）父と争ったことがある。大学へ行くとき、動物学をやりたいというのがその主張であった。これに父は衝撃を受けたらしい。　（全集第五巻 P.238）

藤岡武雄「北杜夫と齋藤茂吉」[34]にはその概要が紹介され、「教育パパとしての茂吉の姿」が指摘されている。また、これまでその間の経過は『どくとるマンボウ青春記』や「死」、『茂吉晩年』等に描かれてきたが、時間的経過や内容がやや断片的恣意的であった。その原因の一つに以下のような手紙の公開過程を挙げることができる。

「I「小園」「白き山」時代」（『茂吉晩年』）によると、昭和二十七年、岩波から茂吉の『全集』が刊行されるにあたり杜夫は茂吉書簡の提供を求められたが、「将来もの書きになろうと決意していた」（P.119）こともあり、「手紙から私が短歌などを作っていたことを知られたくなかった」（P.119）との理由で、一部しか提出しなかったとある。その後、杜夫は「死」に手紙の一部を付け加え、更に文壇に出、茂吉の子であることが周知される中で、残りの手紙を佐藤佐太郎校閲を経て岩波の『図書』（昭和四十七年三月号）に発表した。

本論考では、まず茂吉全集の書簡を基底に、「死」及び『茂吉晩年』と照合し、杜夫の夢の断念に至る過程がいかなるものであったかを時系列で詳細整理する。その後、当時の詩篇、日記等の解釈を進め、動物学の夢を断念した杜夫の内面に迫るべく論考を進めていくとする。

書簡の整理に際しては、『齋藤茂吉全集　第三十五巻』の「書簡三」及び『齋藤茂吉全集　第三十六巻』の「書簡補遺」について、杜夫（齋藤宗吉）宛書簡を抽出する。その後、各年の書簡数を確認し、先の照合を行い、全貌を明らかにすべく検証を進めていくとする。

まず、書簡数については、「書簡三」によると、「昭和二十年～昭和二十二年」の杜夫宛の書簡は、昭和二十年が六通、昭和二十一年が六通、そして昭和二十二年が七通である。更に、「書簡補遺」では、昭和二十二年のみが、七通という結果であった。また、『茂吉晩年』には、全集未収録の書簡が昭和二十年に一通、二十二年に一通

がそれぞれ掲載されている。三者の集計結果は、昭和二十年七通、昭和二十一年六通、昭和二十二年十五通となり、二十二年の茂吉の書簡が他の年の二倍以上に増えている点を指摘できる。以下に各書簡の日付、概要（昭和二十二年は一部引用）、【全集書簡（補遺）番号】及び全集の行数等を列挙する。

昭和二十年

1　六月二十五日、思誠寮　齋藤宗吉君　金瓶より【五四五七】。杜夫の書簡に対する返信。松本高校の生活が無事に始まったことに対する満足、健康、勉強、山形上ノ山「山城屋」への来訪について等、十五行。

2　七月一日、思誠寮南寮三号　齋藤宗吉宛　金瓶より【五四六一】。世話になった松崎亘への礼依頼等、三行。

3　八月十二日、大町皇国三九九工場高瀬寮、宗吉宛、掘田村斎藤十右エ門方より。

「（前略）○それからお父さんがちつとも知らなかったが『憂行』といふのは、『国を憂ひて行ふ』意か、『しづかな歩み』の意か、どういふ出典か教えよ。又たゞの『憂行』だけでは『号』にならぬ、『憂行生』とか何とかせねば具合がわるいだらう」

（『茂吉晩年』P.120）

4　八月二十一日、松崎亘様方齋藤宗吉様（乞御開封）金瓶より【五五〇〇】。八月の帰省について等、四行。

5　十一月二十三日、思誠寮中寮二　齋藤宗吉殿平信　金瓶より【五六三二】。無事勉強の趣、慶賀の至、帰家の予定、文字は楷書で書く習慣を等、九行。

6　十二月四日、齋藤宗吉宛（封筒缺）【五六六四】。転出届の先について、宇田病院の手伝い指示等、九行。

7　十二月六日、思誠寮西寮南寮　齋藤宗吉殿　金瓶より【五六七二】。上ノ山の山城屋に置いてもらえることになった旨、持ち物・着物のこと、上ノ山での母との同居予定、健康等、十六行。

昭和二十一年

1　一月十日、齋藤茂太・齋藤宗吉宛（封筒缺）【五七四一】。山形行きの切符の手配、山城屋への行き方等、七行。

2　一月十二日、齋藤宗吉・齋藤茂太宛（封筒缺）【五七四七】。切符のこと、服装のこと、駅や電車での注意点等、十五行。

3　一月十四日、杉並区大宮　齋藤宗吉殿　金瓶より【五七六〇】。上ノ山での衛生的生活、父の大石田移転、母との生活予定等、九行。

4　三月九日、思誠寮　齋藤宗吉殿　大石田より【五八五七】。無事松本に着いた由安心、貯金しなさい。大石田の天候、風邪に罹った等、七行。

5　十二月二日、思誠寮西寮　齋藤宗吉殿　大石田より【六一〇四】。冬の服装、健康（腎臓）注意せよ等、八行。

6　十二月十三日、思誠寮西寮　齋藤宗吉殿　大石田より【六一一六】。百圓送金、一行。

昭和二十二年

1　二月二十二日、思誠寮西寮　齋藤宗吉殿（平信）　大石田より【六二〇七】。下宿探しについて與曾井・松崎に相談指示、健康面、財産税について、茂吉の六月帰京予定、成績・勉強、「歌もたまにつくり、見せろ」（P.632）等、十七行。

2　三月八日、思誠寮西寮　齋藤宗吉殿（平信）　大石田より【補遺九〇三〇】。体調の気遣い、下宿、五百圓送金、講義の受講につい

て、外食券依頼中のこと、茂太開業のこと、試験、三学期成績を心配、「歌もたまに作つて見せなさい」（P.815）等、十一行。

3　三月十九日、齋藤宗吉宛（封筒缺）【六二三六】。下宿決定よい、「寮歌もなかなか旨い」（P.643）、外食券等食事の件と板垣への礼指示、試験受けなかった学期について「どういふわけであつたか返事よこせ。○三年になったら委員等全部やめなさい。これは父の厳命であるから（中略）若し父の命令きかなければ学費とめる」（P.644）、書簡の末尾に再度「（厳命）」（傍点茂吉）、十一行。

4　四月二十二日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より【補遺九〇三六】。学校近くの新下宿について、図書館利用の勉強方法、健康な生活や養生、「歌もたまに作りなさい」（P.817）等、十一行。

5　五月三十日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より（書留）【六三〇三】。「作家實語鈔」の寄贈先、送金の使途、「歌うまい。ほんの暇の時に作るがいゝ」（P.668）、健康生活、「手紙は十日（二十日）に一ぺん位よこせ、もっとくはしく關先生にも時々遊びに行き、ドイツ語のこと（入學試験等のこと）を聴きなさい（中略）たまにハガキでもよこしなさい。（學校の模様等）」（P.669）十行。

6　六月十三日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より【補遺九〇四六】。「丈夫で勉強のよし安心した」（P.820）、参考書のこと、「歌よいよころがある。著實に生活を歌ふ方がよい」（P.820）、運動部委員はやめる方がよいこと、送金について、「作歌は、勉強（入學試）の邪魔にならぬ程度につくりなさい」（P.820）等、九行。

7　七月九日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より（はがき）【六三四九】。連絡をとれるように不在時には「一週間前に連絡しなさい」（P.686）等、四行。

8　九月二日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より【六四三六】。相応しい下宿探しについて、「堂々と勉強して入學しろ」（P.715）、試験問題の問合せ指示、「お前の歌おもしろいところがある。大學に入つたら、作つてみよ」（P.715）等、七行。

9　九月二十七日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より。

「○猛勉強などといつて徹夜するのはどうかと思ふ、よくよく体と相談してやりなさい。宗吉はあまり頑健といふ方ではないから、いくらか注意しなさい。（中略）○東大の医科は優秀ださうだ、頑張れ」

（『茂吉晩年』P.122）

10　十月四日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より【六四九三】。三十五行。（「死」掲載）

（前略）○宗吉が動物學を好きなことに對して、父は萬腔の同情を持ちます。父も少年から青年（一高時代迄）まで動物學が好きだつたからです。○ところで、動物學を専攻するとして、大學三年で卒業後、どういふ實生活に入りますか、貧乏しながら大學助手になつてしばらく研究するとして、その後は、教員生活をしますか、或は何處かの技師にでもなりますか、只今の動物學者といふ人は、どういふ生活をしてゐますか、これが父にとつても一番知りたい事であり、又一番不安な點であります。〈調査して返事至急ヨコセ〉恐らく安樂な生活が出來ず、特に家庭生活に入るとき、非常に不安な點があるのではないかといふ氣がします。（中略）○茂太なども、平和なら、研究に從事して學位でもとるやう

に大體の方針を立てたのでしたが、敗戦後は全くその方針が破れてしまつたのです。目下では神經科は見込がありませんから、宗吉には外科をでも專攻させて、茂太と別に獨立して生活させようかと、父は夜半の目ざめなどに豫想してゐたのでした。これならばどうにか生活が出來さうである。家庭を持つてもどうにか暮して行けさうである。大學の助手をしてでもどうにか暮して行けるといふ大體の目算でした。動物學に行くとすると、その目算も違つて來ますし、宗吉は難儀な生活をせねばならないやうな氣持がしてなりません。○中學生時代は、學問に對する考はありませんから、大體親だちの意見に從ひますが、高等學校になると、學問に対する考が目ざめて來るから、「適性」等を土臺として、大體「理想主義」になります。これは宗吉のみではありません、殆ど百%がさうでせう。然るに、その理想實現がなかなか困難なために、平凡且つ難儀な生活を送る人が比々として皆然であります。然らばその「理想主義」は結局、平凡且つ幼稚で、青年のセンチメンタリズムに過ぎなかつたといふことになりませう。父は宗吉に目下の現實（gegenwärtige Wirklichkeit）を直視してもらひたいのです。敗戦後の日本と、只今の家庭事情（特に學資、と生活費等の問題）とを直視して貰ひたいのです。（イ）動物學は醫學ならば基礎醫學と類似にて貧乏學問ではあるまいか、一生教員生活ではあるまいか（ロ）目下の茂太の家は家族七人にて、常に赤字、父の印税などを加へて辛うじて生活して居る、父も既に老境である。先づ「老殘の軀」と謂つてよい状態に入つた。○父は無限の愛情を以てこの手紙を宗吉に送る。よくよく、調査〈動物學者の實生活、勤務先、月給等〉の上、熟慮の上、至急返事をよこせ。どうも宗吉の手紙は、父の云つてやつた手紙事項の返事になつて居らぬから、注意してその事項に當嵌るやうに返事よこしなさい。○又、下宿もあまり遠いと勉強不便ではないか、學力は現在どうか、第二學期試驗の成績は何番であるか等を正直に、至急知らせなさい。○父は無理矢理に宗吉の意志を否定しようとはおもわぬが、物事は、熟慮に熟慮を重ねばならぬから、兎に角至急返事よこしなさい。生涯（一生涯）の方針であるから、いくら熟慮を重ねても損になることはない。醫學でも外科などはもつともpraktische Medizinとしては愉快な學問だとおもふが、大體どうおもふか、動物學から醫學に轉じたい志望の人は澤山にあるが、醫學から動物學に轉じたい人は尠いぞ（實生活の上からだぞ）（後略）。（傍点茂吉）

（茂吉全集　第三十五巻　PP.735-737）

11　十月八日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より

【補遺九〇六四】四十七行。（「死」掲載）

拜啓　○父も熟慮に熟慮を重ねひとにも訊ね問ひなどして、この手紙を書くのであるが、結論をかけば、やはり宗吉は醫學者になつて貰ひたい。これ迄のやうに一路眞實にこの方嚮に進んで下さい。これは老父のお前にいふお願だ。親子の關係といふものは純粹無雜で決して子を傍觀して、取りそ（原）まして居るやうなことは無いものだ、その愛も純粹無雜だ。この父の忠告は宗吉が醫學者になり、齢四十を越すとき、いかにこの父に感謝するかは想像以上に相違ない。これに反し若し動物學者にでもなつて、教員生活に甘んじてゐたらどうであらうか。父の心配つまり、子に對する愛の心はその心配となつて現在あるのである。○今般、宮

地教授から來書があつてお前の成績を報じてくれたが、二十九人中十四番で、數學、物理が惡い。この程度では到底東大の醫科には入れない。宗吉は優等の児で小學校も中學も優等生の部類であつた。それが大切にも最も大切な高等學校に入つて優等でないのはどういふ理由であるか、これはバカになつたためである。なまじつか目がさめ、それも眞の目ざめでなく、よい氣の高校生氣質となつたためである。このことについては父はくれぐれも注意したが、それに從はなかつた。併しまだ手遅れではない。この手紙著次第、眞に目ざめよ昆蟲など棄てよ。メスアカムラサキぐらゐでいゝ氣になるな。そして、一心不亂に勉強せよ。本來の優等兒の面目を發揮せよ。高校は眞の目ざめの場處でもあるぞ、今ごろ昆蟲の採集で時間と勢力を使ふといふのは何といふバカであろうか。メスアカムラサキでは宮路（原）君は褒めて來たが、報告するぐらゐはよいが、いゝ氣になるな○宗吉よ、よくよく父の言を味へよ。宮地先生の長男は名古屋大學の醫科を出て、今度國家試驗をパスし、いよいよ病院に勤務し、本人も研究に入り、父の宮地先生も眞の安心の心を以てスミレの研究に殁（原）頭することが出來るやうになつた。宗吉よ、よくよく現實を諦觀せよ。本來からいへば宮地先生の長男君は、本來なら父（宮地君）の精神的繼承者として、植物學を專攻するのは順序であるのに、醫學特に内科醫になつた。これは一體どういふわけだかといふことを諦觀して下さいよ。さうしてこの志望は、植物學者の先生が決めてくれたのであることを諦觀してくださいよ。それから土屋文明さんのお長男も千葉の醫科を卒業され内科醫になられた。これも文學者たるべきのが順序であるのに醫科に入つ（原）のはどういふわけでありますか。又平福百穂畫伯のお長男一郎さんも醫科に居られる。このことをよくよく、徹底して考へてください。このことはただの笑談半分で、宗吉にいふのではありません。無限の愛を以ていふのですぞ、（ここの一條は決して宮地教授その他に話してはいけません）○つまり、これまでの醫科志望を、高校になつてから動揺せしめてぐづぐづして、怠けてゐるやうでは、父の悲歎は大きいのだ。又この九月の試驗成績を見て（教授中には宗吉に同情して採點した人もあると思ふから、實際はもつと成績は惡いのかもしれないよ）悲しむのだ。明春の入學試驗が心配なのだ。それは、動物や植物などならば、低能學生でも無試驗位で入學出來るだらう。醫科（特に東京の醫科は）はさうは行かないよ。そこで學生等は一心不亂に勉強してゐるのだ。今時分の最も大切な時に、メスアカムラサキだの、フアブルなどと言つて居られないのだ。宗吉は、松高に入るまでは優秀であつた。高校に入つてからはおだてられてバカになつたのだ。いかに恐しいことか。○それから、醫學者も從來のやうに安樂には暮らせなくなつた。醫者でも餘程の奮闘を要するやうになつた。茂太なども父の豫想以上に難儀して居る。このことも考に入れる必要がある。○しかし、醫學はおもしろい學問だ。宗吉は未だそれを知らないから動植（原）に興味を持つのであるが、やつて見れば實に複雜で深遠である。醫學の中で、動物植物をも含んで居るのは幾らもある。○學費の點は前便にて報ぜしとほり、○宮地教授よりは、「相當の成績を得られ居り候間、御安神下されたく候」とあるが、父は安神しないのだ。○宗吉の志望等に關するこの手紙は燒棄てたがよい。又、父の意見に對して、至急手紙にて返事よこせ、○物理、數學、化學、ドイツ等の入學科目に全力盡せ下宿に遊びに來る學生あらば、率直に擊退せよ、おだてられて、いはゆる高校氣質に

敗北するな、これは父の嚴命だ○右、激して書いたから、許せよ

父より　宗吉どの（傍点茂吉）

（茂吉全集　第三十六巻　PP.826-828）

12　十月十一日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より【六五〇四】二十行。（「死」掲載）

拜啓○父の前便を讀んで宗吉は悲しんだらう。それは無理はない。自分の志望なり適性なりと反するやうにおもふからである。○別紙は、東京帝大の動物をやつてゐる諸氏からきいた、綜合的返答であるから、只今の宗吉には非常に大切な返答である。どうか、心しづかに讀んで下さい。さういふ諸氏は、先づ生活が心配ない連中であらうが、目下の宗吉には當嵌まらない。又これでは宗吉の眞價を發揮させることがむづかしい。（中略）よつて一心に勉強して下さい。（特に、數學、物理等、宗吉は小學から中學にかけて、數學、物理は得意だつたではないか）、父が賴む。不審のところは同級の出來る學生にきけ、決して恥ではないぞ。（後略）

（傍点茂吉）　（茂吉全集　第三十五巻　PP.741-742）

13　十月十六日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　大石田より【補遺九〇六七】十三行。

愛する宗吉よ　速達便貫つた。　○父を買ひかぶつてはならない。父の歌などはたいしたものではない。父の歌など讀むな。それから、父が歌を勉強出來たのは、家が醫者だつたからである。そこで宗吉が名著（？）を生涯に出すつもりならばやはり醫者になつて、餘裕を持ち、準備をととのへて大に述作をやつて下さい。○下宿は大至急一人一室のをさがしなさい。與曾井さんあたりに賴んで下さい。或は新聞に廣告してもよい。少し位金がかかつても仕方がない。○動物學者にきめることは、この冬休に篤と相談するから、極めずにおきなさい。父の宗吉に對する愛は廣大無邊だから、父も熟慮するし、お前も篤と考へなさい。（中略）醫學者は實に偉いものだ。宗吉は器用だから父は宗吉に外科をさせたいのだが、○只今は、一心にただ勉強して下さい。そしていゝ成績をとつて下さい。下宿をさがして下さい。○父は只今引越支度で寸暇が無い。あとは東京に歸つてからにする。宗吉の父によこす手紙はもう東京宛にして下さい。十月十六日　父より　宗吉どのwichtig!!!◎宗吉はやはり外科醫（宗吉は器用だから、昆蟲の標本を見てもわかる。手術はつまりあれと同じだ。宮尾や紀仁などよりもまだまだ優秀だ）になることを父はすゝめます。（傍点茂吉）

（茂吉全集　第三十六巻 P.829）

14　十一月八日、縣町北区中野太郎江様方　齋藤宗吉殿　代田自宅より【補遺九〇七〇】。帰京の知らせ、外食券を送る件、「専門の問題などは眼中に置かずに勉強しなさい」（P.830）等二行。

15　十二月十日、若松町大久保様方若松館　齋藤宗吉宛　代田自宅より（書留　齋藤輝子との寄書）【補遺九〇七七】。米の調達依頼について、「友人の下宿で一日でも餘計に勉強して來て下さい」（P.832）「新年を皆して迎へたい」（P.832）等四行。

以上、『齋藤茂吉全集』の書簡及び書簡補遺（引用の傍点は原文では傍。傍▵傍点の使い分けあり、文字表記は一部現代表記）、「死」、

『茂吉晩年』等を照合しながら、時系列で書簡を整理した。

（2）動物学志望の断念

書簡の経過を見ると、昭和二十年、二十一年の内容は日常生活の健康や養生、送金等細々とした茂吉の心遣いについての連絡等で、全集の行数も平均すると九行程度である。ところが、昭和二十二年になると、その内容、行数共に大きく変化していく。最初のうちの内容は、それまでと変わりがない生活の心遣いに加え、短歌や寮歌の感想、評価等が記されていたが、三月十九日辺りから「厳命」「命令きかなければ学費とめる」と口調が激しく命令調になっていった。更に「入学試験のこと」等徐々に杜夫の進路や勉強について心配する茂吉の心境が明瞭になっていく。昭和二十二年の全集の行数は平均十四行程に増加していった。

『茂吉晩年』では、九月二十七日の手紙の後、杜夫は父からの成績の問い合わせがあったこともあり、当時の学力から医学部は無理と考え、「将来ファーブルのような道を歩けたら」（P.122）と、動物学希望の手紙を茂吉に送ったとある。この手紙が茂吉にとっては大きな衝撃となったと考えられる。十月に入ると、動物学では生活費が心配だから医学を志すようにという茂吉の願いが伝えられた。そして、十月八日には茂吉の論調は更に強くなり、「医者になつてもらいたい」と杜夫の進路に対する直接願望の言葉になっていく。茂吉は知り合いの子らが皆医学を志したことを例に挙げ、動物学よりも、医学を志し、入試科目に全力を尽くせ「父の厳命だ」と益々厳しい筆致へと変化していった。

そして十月十六日、「愛する宗吉よ」「父の歌など読むな」という禁止的な命令となっていった。『茂吉晩年』では、この手紙の後、杜夫は自らの志望を諦め、「それほど神経の強靭でない私は動物学志望を断念した」（P.129）と記している。茂吉はその後も、「歌などすぐ止めよ」「今後学費送らぬ」「荷車引きになれ」といった激しい言葉を手紙に書き、杜夫に送ったという。杜夫の当時の心境は次の短歌に表現されている。

このちは金送らずといふ父の手紙わが机に置きて去りし友はや

このちは荷車引きになれといふ手紙を見つつもだしてゐたり

（PP.129-130）

（3）「寂寥」「停電哀歌」「木枯」

昭和二十二年十月十六日、「愛する宗吉よ」に始まる手紙を受け取り動物学志望を断念し医学部を目指す選択をした杜夫は、そのショックから神経衰弱に陥った。杜夫は「一人で穂高を見たらおそらくこの鬱々たる心情も回復するであろうと自ら信じ」（「銅の時代」、全集第十三巻（P.89））その秋、島々から徳本峠に向かった。杜夫は穂高の威容を望み、一旦は神経衰弱状況を克服していった。「寂寥」「停電哀歌」「木枯」の三篇はその直後の詩と言える。三篇はいずれも『うすあおい岩かげ』に収録されているが、その刊行まで杜夫の筐底にあった作品である。これらの作品は当時の杜夫の直接的な心境を描いており、貴重な三篇であると言える。（題名、歌集掲載番号）

寂寥　11

かさこそと落葉動きて

入りくれば樹々の寂しさ
渡り鳥梢を去りて
見あぐれば空の虚しさ

いつしかに季節（とき）の移りて
見渡せば四方（よも）のはかなさ

しんしんと幹冷くて
寄りそえば息のかそけさ

生けるもの土にひそみて
佇めば音のともしさ

かさこそと落葉動きて
さまよえば人の恋しさ

（一九四七年十一月）（『うすあおい岩かげ』（PP.31-32））

題名「寂寥」は杜夫が愛聴した寮歌「春寂寥」の寂寥感や、杜夫が文学に覚醒していく契機ともなり共感的に読み親しんだ「くれなゐの茂吉」に象徴される茂吉の初期歌集『赤光』『あらたま』の韻律とも共鳴する語であるが、本詩の「寂寥」は、それまで杜夫が短歌に詠んできた青年期の感傷的な「寂しさ」「はかなさ」「悲しさ」等の「寂寥」から質的に深まり、人生を見つめるような「寂寥」に、変化していったと考えられる。父茂吉に進路変更を余儀なくされ、自らの夢を断念せざるを得なかった杜夫の心境とはいかなるものであったか解明すべく、本詩の解釈を進めたい。

「寂寥」は全六連の文語的定型詩である。各連は五七調の二行で長歌的に統一され、各連二行目の結句はいずれも順接の接続助詞「ば」の後に「寂しさ」「虚しさ」「はかなさ」「かそけさ」「ともしさ」「恋しさ」と心情を表す形容詞の転成名詞が置かれ、サ音の体言止めが韻を踏み、詠嘆が反復されている。五七調の韻律は万葉集に多く、茂吉の短歌の影響はもとより、杜夫が松本高校一年の頃に親しんだ島崎藤村の影響も見られ、素朴で力強く荘重な印象が感じられる。

第一連は「かさこそと」の落葉を踏みしめた際の聴覚的実感からの連想として、行間にはかつて昆虫採集に夢中になった晩秋の森に分け入った情況を含みつつ、今分け入ってみると葉を落としてしまった「樹々の寂しさ」と詠嘆で結んでいる。そこには夢を断念せざるを得なかった杜夫の失意の溜め息さえ感じられてくる。

第二連は視覚的に、かつて昆虫を探し歩いた自分と同じように、あれほど飛び交っていた鳥たちであったが、今はその姿はなく、自分もまた夢を断念してしまった。こうした思いで見上げると「空の虚しさ」ばかりと詠嘆することで、叶わなかった夢が空に漂う余韻がある。

第三連では第一連第二連と樹々や空に自身の心情を重ね、夢を追いかけていた過去の自分を寂しく虚しく思い起こすほどに「季節」の流れを実感する。自分の周りを見渡すと「四方のはかなさ」と詠嘆せざるを得ず、つとめても夢を手に入れることができなかったという思いが感じられてくる。

第四連は十一月の裸樹の幹に触れた感触の実感が「しんしんと幹冷くて」と表現される。畳語「しんしんと」は茂吉との影響を考慮すれば、身に迫りくるほどの冷たさと解することができる。こうし

た冷たくなった幹に寄り添い、「息のかそけさ」と詠嘆し、消えてしまいそうなほどに幽かな自らの息（命）を見つめている。

第五連は土の中にひそんでいる生きもの（昆虫）に意識が向けられる。かつてのように佇んでみても、昆虫など生き物の動く姿もなく、「音のともしさ」と詠嘆せざるを得ない。「ともしさ」（「乏しさ」の意）には求めるもの（昆虫学の道）を得られない、現実の欠乏感が込められていると読み取れる。

第六連は再び第一連の冒頭行を置き、首尾の一貫性と統一性を表現し、「寂しさ」「虚しさ」「はかなさ」「かそけさ」「ともしさ」を抱きつつ森を彷徨うと、寂寥感は益々募り、「人の恋しさ」と詠嘆せざるを得ない。そこには言うにいわれぬ孤独感が読み取れる。

「寂寥」の主題は、「昭和二十二年十月、動物学志望の夢を断念し、神経衰弱を克服しようと徳本峠から穂高岳を望み、回復しつつあった頃、かつて昆虫採集に訪れた森に分け入り、以前とは異なり、人生の深い寂寥を感じ孤独な心境を詠嘆している杜夫」と解釈することができる。

『どくとるマンボウ青春記』では、杜夫は当時の心境についてギリシャ神話に喩えて「その過去は祝祭にも似ていた。しかし神話の黄金の時代はあっという間に過ぎ去り、いがらっぽい「銅の時代」が私をとり巻いていた」（「銅の時代」全集第十三巻P.89）と振り返っている。本詩の「寂寥」は杜夫の「銅の時代」の「寂寥」とも言えよう。

停電哀歌　12

電燈がふっと消えてよ
代用燈に火をともす　外は闇でよ
黒い油煙がゆらゆらあがる　恋はかすかで
暗い火影がちらちら動く　夜は静かで
ぐーんと静かでよ
さびしうてよ
ゆらぐ火影でひとり文字をつづってよ
ただ文字をつづってよ
さびしうてよ

（一九四七年十一月）（『うすあおい岩かげ』（PP.33-34））

「停電哀歌」は「寂寥」に続いて『うすあおい岩かげ』に掲載された作品である。九行からなる口語自由詩で、「寂寥」とほぼ同時期の十一月の作品である。杜夫は三年になると寮を出て下宿生活に入ったが、冬の下宿生活では「停電が頻々とあった」（「銅の時代」全集第十三巻P.91）と回想している。本詩は停電になり代用燈に火をともし文字を綴った際の寂しい心情を描いている。「文字をつづってよ」の反復の前後に「さびしうてよ」とあることから、寂しさを抱きながら勉強に向かっていたと分るが、本詩の寂しさとは如何なるものであったか、明らかにしながら解釈を進めていきたい。

「銅の時代」には十月の徳本峠行の直後に、冬の思い出として下宿生活の停電について触れた箇所がある。「停電哀歌」の直接的な体験が記されており、以下に引用する。

予告もなく電燈が消えてしまうと、畳の上に仰向けになって、とりとめないもの思いにふけった。頭に去来するのは、若葉青葉のそよぐ山路、郭公の声、はては馬鹿げた寮時代の回想ばか

りである。

挙句の果て、電気がついたあとも、たまらなくなって詩集の一冊をとり、これまで胸に刻みこまれた詩の数行をたどり、徒らにため息をついた。しかし、今は何はともあれ大学に合格しなければならぬ。（中略）

当時停電にそなえて代用燈というのが売りだされていた。（中略）これをつけると黒煙が濛々と立ちのぼり、鼻の穴が真黒になった。このゆらゆらと揺れるかぼそい灯の下で、参考書を開いていると、さすがにもの悲しい思いがこみあげてきた。

（傍点引用者）（全集第十三巻 P.91）

これら「銅の時代」の記述から本詩の「さびしうてよ」の内実を三点ほど挙げることができよう。一点目は、今となっては決して戻ることができない、三年の進路について悩む以前の「黄金の時代」への懐古。二点目は、好きな詩を読む時間も惜しんで大学合格に向かって勉強しなければならない現実。そして三点目は、「くれなゐの茂吉」に関連する代用燈のかぼそい灯、「ゆらぐ火影」である。杜夫はちらちらと動く暗い火影に自らの命を重ね、「懐古」と「現実」に寂しさが募り、耐えきれないほどに増幅されていったものと推察される。そこに本詩の表現の特徴の一つ、間投助詞「よ」を用いざるを得ない心境があったと考えられる。「さびしうてよ」は誰かに呼びかけずにはいられないほどの寂しさの詠嘆となって描かれている。本詩の主題は、「受験勉強に向かっていた高校三年十一月の或る夜、停電となり、過ぎ去りし日が次々と回想される中、大学合格という現実の目標に向かおうと代用燈の灯りで勉強していると、抑えきれない寂しい思いが込み上げてきた杜夫」と解釈することができる。

木枯　33

木枯がふいてるよ
木枯は冷たいの？
そう　木枯はきっと冷たいだろうね

——炭火が赤くて
——子供たちのほっぺたも赤くて
——おじさんの鼻も赤くて

魔法使は空を飛んで行ったの？
箒に乗って飛んで行ったの？
そう　木枯のように飛んで行ったんだよ

魔法使いは焼けてしまったの？
魔法の箒も焼けてしまったの？
そう　やっぱりボウボウと燃えてしまったのだよ

——炭火が赤くて
——子供たちのほっぺたも赤くて
——おじさんの鼻はもっと赤くて

木枯がまだ吹いてるよ

木枯はどうして冷たいの？
そう　とにかく木枯はまだ吹いてるね
（一九四七年十二月）（『うすあおい岩かげ』（PP.84-86））

「木枯」は全六連の口語自由詩である。詩の構成をみると、「子供たち」と「おじさん」の対話・劇的形式をとっており、第二連、第五連は思考線二字分落として書かれていることから対話とは区別するト書的な挿入と考えられる。全体の構成は、第一連「対話」（三行）、第二連「ト書」（三行）、第三連「対話」（三行）、第四連「対話」（三行）、第五連「ト書」（三行）、第六連「対話」（三行）である。この形式は島崎藤村の「四―深林の逍遥、其他」（『藤村詩集』（角川書店、昭45・7・20）にも見られ、深林を逍遥する「旅人」「山精」「木精」の各連によって構成されている。「優曇華」（『うすあおい岩かげ』）に「山精」が登場することや、杜夫の『幽霊』につづく二作目が『木精』であることを考えると、杜夫が愛読した藤村の詩形式の模倣であった可能性もある。

本詩の情景は、木枯の吹く夕暮れどきに、焚火を囲んで子供たちとおじさんが木枯について語り合っている場面が想像できる。全体の詳細な構成は以下の通りである。

第一連（対話）　木枯に気づいた子供たちが「木枯は冷たいの？」とおじさんに聞き、優しく受容的に答えてもらう。
第二連（ト書）　炭火、子供たちのほっぺた、おじさんの鼻が赤いことが補足される。
第三連（対話）　木枯から「魔法使」を連想した子供たちが、「空を飛んで行ったの？」「箒に乗って飛んで行ったの？」とおじさんに聞き、優しく受容的に答えてもらう。
第四連（対話）　目の前の炎から子供たちが「魔法使いは焼けてしまったの？」「魔法の箒も焼けてしまったの？」とおじさんに聞き、やはり優しく受容的に答えてもらう。
第五連（ト書）　二連のト書のほぼ反復であるが、一箇所「おじさんの鼻はもっと赤くて」とおじさんの鼻の赤色がより色味を増したことが補足される。
第六連（対話）　子供たちの関心が再び冒頭の「木枯」にもどり、子供たちが「木枯はどうして冷たいの？」とおじさんに聞くと、これまで受容的であったおじさんに「そう、とにかく木枯はまだ吹いてるね」と返事をはぐらかされる。

ここで注目したいところは二点である。一つ目は、第五連で子供たちが変化しないにも関わらず、おじさんの鼻だけが「もっと赤くて」と程度が増している点である。二つ目は第六連のおじさんの返事がそれまでの受容的な返事に対して異質な点である。おじさんが、子供たちの問いに答えることが煩わしいと思ったのか、適当な答えが見つからなかったのかは不明であるが、結果的におじさんは質問に直接答えず、はぐらかしてしまう。一篇はこの第六連で終り、その後、子供たちの心には木枯に吹かれるような寂しさが残ったであろうと想像させられる。ここに、杜夫の意図があったと考える。一篇に描かれる子供たちとおじさんの関係に注目したい。おじさんにだけ「もっと赤く」と変化が現れて、子供たちが問いに答えてもらえない想定外的情況は、当時の杜夫の事情を重ねて考えると、杜夫と茂吉の関係に類似している。松本高校二年、三年と短歌を認められ

ていたにも関わらず、三年の十月に受験勉強に励むため、突然短歌を作ってはならぬと茂吉に告げられた。茂吉の急変は想定外であったであろう。

そこで作品主題を、「焚火を囲んで木枯についておじさんに質問し受容的に答えてもらっていたが、途中からおじさんの様子が変わり、想定外の返事に戸惑い、木枯のような一抹の寂しさを抱いている子供たち」と捉えることができる。その寂しさは、父茂吉に自分の想いを伝えても理解されなかった杜夫の心情であったのではないかと考える。

その年の十二月、松本平特有の木枯の音に、一篇の幻影を抱いた杜夫は、自らの心情を子供たちに重ね、「木枯」を創作したと推察する。『幽霊』第三章には、精神の病に罹っていた主人公「僕」が松本の夜の町を彷徨い歩き佇んでいると、ふいに木枯を聞く場面が描かれる。本詩の素材となる情景と考え以下に引用する。

とおく幻覚のように連なっている雪と氷につつまれたアルプスの峰々から吹きおろしてくる木枯しであった。あたかも巨大な魔神が街の上にとびきたって、ほしいままに翔けずりまわり、夜明けとともに引きあげてゆくといった感じのする、異様にすさまじい突風であった。（中略）すりきれたマントは、骨の髄までしみとおる寒気をどうすることもできなかった。しかしその寒気は、自分がまだたしかに生きているということを僕に伝えてくれた。

（全集第三巻 P.64）

（4）日記「十二月五日」

『どくとるマンボウ青春記』には、先の動物学志望断念から間もない昭和二十二年十二月五日に詩形式の日記を残している。以下に本詩を引用し、解釈をしながら、杜夫の心中を探っていくとする。

（前略）日記から直接、妙てけれんなものを引用しておく。十二月五日、当時私は一人きりの下宿にいて、大学入試の勉強のため神経衰弱気味であったらしい。炬燵の火を起すのがヤッカイで、そのたびに一騒動で、精神も錯乱状態になるのであった。

ポウポウと竹[35]を吹く
一点の赤きものをどりて
つかのま火の粉をちらせば
やうやくに黒き炭どもヤケドを起し
ボウボウと叫びをあげぬ
昨日はすでになく
今日のことはあと半日の思ひなり
理解されざるを憤るにあらずして
むしろ理解しあたはざるを憤るなり
くやしくやし
されば フンヌを叩きつけんとて
無性にポウポウと竹を吹く

青きほのほ　黄なるほのほ
ボウボウと音を発すれど　なほわが心なぐさみがたし
赤き火の粉舞うては消え
何もののくすぶるかいたき煙にわれは涙ながせり

涙ながるれどもなほフンヌやりがたくして
ポウポウと力をこめて竹を吹く

ライ病患者のごとき男　今日も町にて会へば
かぶりしマントの中からニヤリと笑ひて
手をとり映画を見んと誘ふにあらずや
断れば即ちかくしより短き喫ひがらを出し
われに与へんと　言ふにあらずや
なほ人あり　ストーブの煙に隠れて
授業中に煙草を喫ひて快なりと誇る
なほ人あり　フランスの話をして去りぬ
なほ人あり　会ふや直ちに人を面罵し
人のパンを奪ひ食ひて得々たり
なほ人あり　人の顔を見るやをかしげに笑ひて去りぬ
ああ　フンマンは大地に満てり
さればポウポウと竹を吹く

十二月の松本の空気は
すでに石のごとく固し
傷口はうづきてコタツは未だ寒し
われの心氷より冷くしてかつ熱気をはらむ
おのが胸中のわれにも不明なるをもつて
おのが心にあきれかへりしをもつて
何が何やらわからなくなりしをもつて
ただヤケになり　ポウポウと竹を吹く

隣室の幼子は悪魔よりみにくし
その泣声は今は堪へられず
今宵彼女をしめ殺す夢を見ざれば幸なり
炭は赤く赤く叫びたれど
火の粉をどれど
ああ　人々々々
われの憤りはやまず
世にわれあることも瞬時にして堪へがたし
されば　むやみにポウポウと竹を吹く

（全集第十三巻 PP.75-76）

本日記は文語自由詩の形式で表された全五連の日記である。杜夫は日記本文の前に「妙てけれんなもの」と自嘲して言葉を添えているが、それは茂吉譲りともいえる杜夫流の韜晦であって、この日記には当時の杜夫の内面の一様相が表れていると考える。

まず、解釈の視点を第一連中ほどの「理解されざるを憤るにあらずして／むしろ理解しあたはざるを憤るなり」に向けてみたい。口語訳すると「理解されないことを憤るのではなくて、むしろそれよりも、理解することができないことを憤るのである」と読み取ることが出来る。主語が省略されているが、この場合は「憤るなり」と結ばれていることから、主語は作者杜夫自身であると解される。

では、杜夫は「誰」（何）に理解されないことを憤るのではなく、「誰」（何）を理解することが出来ないことを憤ったのであろうか、という問いが生じてこよう。一見したところ、本詩の中で、杜夫が憤りを抱く対象は、第一連では思うように起こせない炭火、第二連では自分が出会った気になる人々。そして第四連の幼子と読み取れ

るが、第三連において「おのが胸中のわれにも不明なるをもつて／おのが心にあきれかへりしをもつて／何が何やらわからなくなりしをもつて」（傍点引用者）とあることから、作者杜夫自身にも真相は不明で、何かに突き動かされているような情況であり、不明であるが故に苛立ち、「フンヌ」は益々激化し、心の深部の「フンヌ」「フンマン」が、この日記全体に波及していくと読み取れる。遂に、最終第四連では「世にわれあることも瞬時にして堪へがたし」と生きることさえ辛くなるような思念に襲われていったと全体の構想を理解する。このような杜夫の心の深部には一体何があったのであろうか。

この問題を解明する糸口としてまずは、「4憤怒など」[36]に目を向けてみたい。杜夫はこれまで、父茂吉の怖ろしさやその憤怒の姿について「おやじ」や『青年茂吉』等、様々なところで描いてきているが、「父が憤怒するたびに、それがあまりに爆発的、圧倒的であるゆえに、私たち子供は息をつめ、身がちぢこまる思いをした」（全集第十五巻P.276）と茂吉の憤怒について、杜夫の少年期から大学時代まで、その思い出が綴られている。以下に順番を追って概観する。

一、茂吉が風邪で休んでいるところに、地方会員が面会を願った際、「おれは本当に風邪で寝ている。嘘だと思うのか」と「五分間ほどやむにやまれぬ憤怒を継続していた」こと。二、杜夫が学校で「水泳のパンツでなく六尺フンドシが必要」になったとき、「六尺は必要ない。もっと短くてよい」と「ブルブル震えながら」怒ったこと。三、中学時代までは、杜夫にとって怖い人の茂吉が、高校に入ると父の短歌を崇拝するようになり、日常の「強靭な体臭を発散する茂吉という男が、ふたなりとなって存在する」（傍点引用者）ように感じられ、「言いがたくかなわないこと、判断に苦しむこと」（傍点引用者）であった思い出。四、大学時代に老境の茂吉の孝行にと箱根の山荘で二人暮らしをした時、塵取りの持ち方、友人のつまらない電報、ツクダニ屋のツクダニの送り方等に憤怒したこと等である。これらの茂吉の憤怒の経過をみると、杜夫の高校時代の茂吉の印象は、怖い人から「ふたなり」「言いがたくかなわないこと」「判断に苦しむこと」へと変化してきたことが指摘できる。

特に、本日記が書かれるひと月半程前には父の手紙の厳命により、動物学志望を断念する出来事があったばかりである。『どくとるマンボウ青春記』には、穂高の偉容を望み、「このとき、私の神経衰弱状態は嘘のようにあらかた消失した。今から考えれば、適度の運動療法と自己暗示のようなものであったろう」（全集第十三巻P.89）とは記しているものの、昭和二十二年、高校二年の終りには「蟲と共に」を発表し、同年九月には「六脚蟲の世界」に夢を描いていたばかりである。そう易々と折り合いをつけることは難しかったであろう。父茂吉に対しては、人知れず内面の葛藤を抱えていたと推察する。

このように本日記の背景を見てくると、当時杜夫は進路の葛藤を抱きつつ、一面では怖ろしく、また一面では崇拝の念を抱く父茂吉を理解し難い存在として受け止めていた時期があったことが見えてくる。以上のことから、先の問い「誰」（何）に「誰」（何）をの「誰」（何）は父「茂吉」とその性格であった可能性がある。

しかし、本日記自体が杜夫の「フンヌ」「フンマン」を描いていることから、茂吉を理解できない杜夫自身もまた父と似たような抑えられない憤怒を抱いており、自己理解が出来ない一面、アイデンティティ[37]の危機的な様相もあったと考えられる。加えて、『幽霊』の主人公「僕」に描かれるように杜夫は「二十歳のころ、なかんずく

戦争が終ったあと、私はしょっちゅう死のことを考えていた」（「Ⅳ「ともしび」時代」P.165（『壮年茂吉』））とあることから、死への親近感が心の深部にあったとも察せられる。

こうした父と自己の存在に対する理解できない苛立たしさが「フンヌ」「フンマン」の正体であり、それは杜夫固有のものであったと感じざるを得なかったため、あえて片仮名で表記したと読み取ることができる。晩年、杜夫は「カンシャクについて」[38]に、「本当は、私は子供の頃、やはりカンシャク持ちでもあった」（P.42）と吐露し、父茂吉との共通性を述べている。

杜夫は「高校生になってようやく父のことをもっと知りたいと思うようになった」（『青年茂吉』P.199）と記しているが、茂吉の性格については兄茂太の『茂吉の体臭』に詳しい。『青年茂吉』には「もっとも強かった気質は癲癇気質（粘液質）であり、次に神経質であった」（P.121-122）と紹介している。また「癲癇気質には、徹底癖、執拗性などと共に、どうしても癇癪持ちの性格も伴なう」（P.128）と説明している。杜夫は茂吉の短歌を崇拝するようになってから、それまでのおっかない存在だけではなく、茂吉という人間が持つ人間性の複雑さに目を向けていったのであろう。杜夫には松本時代の終り頃、茂吉や自分に対して理解したくとも理解しきれない疑惑や焦燥感等、精神的に不安定な情況があったことを様相の一つとして捉えておきたい。

その後、杜夫は自己理解と父茂吉理解を深め、二人にしか共有できないであろう深い親子の情愛へと向かっていったと察することができる。以下にその根拠となる叙述を三つほど紹介し、「日記　十二月五日」の解釈とする。

○『お父さまの歌には、おのずからなるフモール[39]があるのがあっていいですね』

『そうかね』

『真面目になってお作りになるんでしょう？』

『そうだよ。一生懸命だよ』

（昭和二十五年の夏、茂吉最後の箱根滞在中の杜夫の日記に見られる相互理解、引用者付記（『晩年茂吉』））　（P.197）

○「この私も少しは父の血を受け継いでおり、躁病のときは父の三分の一ほど怒りっぽくなり、かつ旧制高校から大学にかけて、父の歌の中でもことさら感傷的なものをずっと好んだように、或る点では父と酷似した感傷家であった。」（傍点引用者、『青年茂吉』）　（P.7）

○「茂吉は憤怒するときは悪鬼ともなるが、その反面、心のほそい、或るいは神経の弱々しい人間であった。この二面性は父の大きな特徴だ（中略）。いったん或る感情に囚われると、父の場合、それが人の数層倍の激情にもなるのである。そしてまた、茂吉が写生を念としながら、ときによると大胆な空想歌、心象歌を作ることも忘れてはなるまい。」（傍点引用者、『青年茂吉』）　（P.19）

6　アイデンティティの危機から認識の深化へ

（1）「真夏の衝迫」「斑雪」「帰ってくるものに」

本三篇は先の「寂寥」（11月）「停電哀歌」（11月）「木枯」（12月）そして「日記十二月五日」（12月）に続く昭和二十三年一月から三月にかけての作品群である。杜夫の「銅の時代」は冬から春へと徐々に移りつつあり、高校生活も終盤を迎えていた。「真夏の衝迫」（1

月）「斑雪」（3月）は先の四篇と同様、『うすあおい岩かげ』刊行まで杜夫の筐底にあった作品である。「帰ってくるものに」（3月）は執筆から一年後、初めて「文学集団」（昭和24・4）に投稿し「成長」と共に掲載された作品である。　（題名、歌集掲載番号）

真夏の衝迫　21

ものみなの饐ゆるがごとき空恋ひて
　鳴かねばならぬ蟬のこゑ聞ゆ　（茂吉）

酸ゆるもの
十方に満ち、
蟬、わめかざるべからず。
果実、腐らざるべからず。
酸ゆるもの
満ちに満ち、
われ、
大地の胎内に
蒸されざるべからず。

息吹
山頂に黙し、
ぎらぎらぎら
菫外線の乱舞。
虚空ふかく
価値を定むるものの
極微にひざまずき
冷熱に涙す。
盛夏の忿怒
成長に形骸となり、
真夏の懊悩
醗酵を因果となす。

神経のかかる蠕動は何ぞ。
脈搏のかかる狂乱は何ぞ。
嘔吐、
嘔吐、
然うして
心髄に徹する寂寞。

酸ゆるもの十万に満ち、
蟬、わめかざるべからず。
われ
万象を超えておどらざるべからず。

（一九四八年一月）

（『うすあおい岩かげ』（PP.51-54））

一篇は全四連の文語自由詩で冒頭に茂吉の短歌が置かれている。作品の冒頭に茂吉短歌を置くスタイルは、随想「蟲と共に」（昭和22）と同様であるが、『うすあおい岩かげ』中では他に例を見ない。このスタイルには、杜夫の意図があったと考えられる。

この茂吉短歌は、「12　土屋文明へ」（『赤光』）に収められている。

歌意は、すべてが酸敗するような夏の空に向かってなおも鳴かねばならないかのように蝉が鳴いていると、茂吉にとってはひとごととは思えず、悲境においても生きねばならない生を描いていると読み取れる。杜夫は「Ⅰ「赤光」時代」で一首について「茂吉独自の体臭」（P.82）が出ており、「茂吉以外には作れぬ作として愛好した」（P.82）と記している。

『青年茂吉』には茂吉の特徴的な性格について指摘されている。「茂吉は気温にごく敏感で、雨のくる前、なかんずく雷がくる前、事前にそれを感じとった。雷の前にはよく頭痛を訴えた」（P.122）とある。更に、茂太の『茂吉の体臭』より、「父の一番の苦手は、生あたたかい南風の吹く日であった。そういう日は、さかんに、『具合がわるい』を連発した。低気圧の近づく日もまた同様であった。台風がまだ、九州のはるか南にある頃に、父はすでに身体の変調をうったえた」（P.122）と茂吉の特徴を紹介している。茂太の茂吉の性格分析によると、もっとも強かった気質は癲癇気質（粘液気質、父熊次郎（襲名して伝右衛門）より）であり、次に神経質（かなりの部分は母いくより）であったことは広く知られている。

本詩は一月でありながら夏を描いており、『寒雲』の「木芽」連作のように、一見内容がばらばらに見えるが、一つの情調（気分）によって連絡がありつながり、最後まで読ませるという手法を連想させる心境的な詩であると考えられる。第一連、杜夫のイメージは茂吉短歌に触発され、父茂吉の性格と似たところがある自身も、蝉や果実のように「われ、／大地の胎内に／蒸されざるべからず」、「われ」も蒸されないではいられないと描き出す。「ざる・べから・ず」の連語は、二重否定として、強い義務・命令を表すが、「……しないわけにはいかない、……しなければならない」といった意と解することができる。このフレーズは冒頭連と最終連に繰り返され、独特な衝迫的で黙従的な情動を表している。

こうした心境から、第二連の連想は、「息吹」「山頂」「堇外線の乱舞」「虚空ふかく」「価値を定むるもの」「冷熱」「盛夏の忿怒」「成長に形骸」「真夏の因果」と次々に連想が移っていく。これらの連想中、「盛夏の忿怒」には茂吉の特質が浮かぶように感じられる。

第三連は第二連の連想を体験した杜夫が、肉体的な実感として、「神経のかかる蠕動は何ぞ」「脈搏のかかる狂乱は何ぞ」と自身にも判明できかねる「蠕動」「狂乱」の後「嘔吐」へ、そして深い「寂寞」へと向かっていく。この連は、本詩から一か月ほど前に書かれた先の「日記、十二月五日」から間もない頃の作品であることを考慮に入れると、茂吉と似たような気質が自分にもあると気づき始めた杜夫が自己を十分受容しきれず、アイデンティティの危機から、激しい嘔吐感に見舞われたと読み取ることもできる。

第四連では、第二連、第三連の連想と実感を経て、再び悲境においても生きねばならない蝉のような命の共感的衝迫の反復へと戻っていく。

このように各連の構想を見てくると、一篇の主題は、「動物学を諦め、医学部受験に向けての勉強に向かいつつ、茂吉特有の体質に思いを馳せ、茂吉と類似したところのある自己の性格を見つめつつ精神的には自己理解に対する不安定さを抱えながら、現実の厳しい情況であっても生きねばならなかった杜夫」と考える。

斑雪（はだらゆき）　2

淡淡（あわあわ）と　光ながれて

斑雪　岸辺にしろし
水の音さえ　かすかになりて
枯野辺に　まなこつむれば
ひそかなる　希みこみあげ
こん春の　影を慕いぬ

（一九四八年三月）（『うすあおい岩かげ』（P.13））

帰って来るものに　6

おもいはしばしたたずむだろう
あの唐松林の　木屑のこぼれた切株に
煙る雨に　ふくらんでゆく　さ緑に
閑古鳥も　峡に呼びかわした　そんなゆうがたに

あれもこれも　とうに忘れはてた時――
そんな透きとおった空が　嘗てあった　と
こうして　澄みきる空が　今あるにしろ
ゆっくりと　季節が　いま野をめぐるにしろ

ためらいながらも　想いだすのは
小屋のゆうべに　ほの白かった樺の幹　と
見入っていた私の前で　かすかにゆらいでみせた水の鏡
と
――ああ　とおく消えて
ふたたび帰ってくるに違いないもの達――
つづりあわそう　ひとつの　私の物語として

ほのかに　淡淡と
ためいきのように　ゆらぐともし火のように
蒼くしずまりかえる夜空を截った　あの一筋の星の軌道の
ように

やがてひとつの　宵が　夜半が　訪れるだろう　ひそやか
に
ひとしきり　あの日々が　あの影たちが
優しくかなしく　私をとりかこむだろう　白くかすみつつ
その夜　落葉が窓辺にささやいて
そのようなくりかえしに　私は瞳をふせるだろう

（一九四八年三月）（『うすあおい岩かげ』（PP.20-22））

「斑雪」は五七調の文語定型詩、「帰って来るものに」は全五連の口語自由詩、と表現形式は異なるものの、ほぼ同時期、三月に書かれた作品とあって、叙述やテーマに類似性が見られる。「斑雪」は斑に降り積もった雪や斑に消え残った雪の意であるが、早春の信州では多く見かける光景である。杜夫は、川辺に目を向け、「淡淡」とした春陽や斑雪、水の音等、大地が芽吹く直前のひと時期を捉えて、そこに既に「ひそかな希み」を抱き、春の「影」を慕ったと春を待ち望む心境を描いている。

また杜夫が『どくとるマンボウ青春記』に「道造の詩の完全な模倣」（全集第十三巻　P.73）と述べた後に紹介している「帰って来るものに」も未来への希望や意志が描かれていると考える。第一連

には、かつて体験した落葉松の「切り株」、煙る雨にふくらんでいく「さ緑」、閑古鳥の呼び交わした夕方等にたたずむであろう「おもい」。第二連では、かつてあった「透きとおった空」。第三連では、かつて小屋の夕べに見た白樺の幹や水の鏡の再び帰って来るに違いない想い出を、「ひとつの私の物語として」綴り合わそうとする未来への意志。第四連では、追憶を「淡淡」とした「ためいき」「ともし火」「一筋の星の軌道」等に喩える。第五連では第四連の追憶により、過ぎてしまった「あの日々」「あの影たち」が私をとりかこむだろうと未来を予測展望している。

この二編と「寂寥」（11月）「停電哀歌」（11月）「木枯」（12月）「日記十二月五日」（12月）の四篇を比較すると、四篇が描かれた時期から、しばらく経って一月以降の卒業間近になると、春を待ち望み、幽かではあるが徐々に未来への希望や意志を見出すように変化していった時期があったと指摘できる。「医学部というところ」（『どくとるマンボウ青春記』）には当時について以下のような記述がある。

> 東北大学を受けた。そこの医学部にはよい教授が多いという理由より、なにがなし仙台という名に憧れたのである。松本という城下町は、私の想像以上に気に入った町であった。仙台にも、東北の木の香のごときものが漂っていることだろう、と私は想像した（後略）。（傍点引用者）　（全集第十五巻　P.94）

（2）仙台時代の詩　①（追憶）

昭和二十三年の四篇の詩「穂高を見る」（7月）「うすあおい岩かげ」（9月）「あの頃の歌」（9月）「成長」（11月）はいずれも東北大学入学後の作品群であるが、松本時代を追憶し題材にした作品群であるため、本論考に加えて作品を引用し、若干の考察を添える。

（題名、歌集掲載番号）

穂高を見る　10

みなぎりわたる光の下、
山霊のひびきあう壮麗の穂高を
動悸と共に俺は見た。
空はあくまでも透きとおって
色彩は山嶺（さんれい）に凝結（ぎょうけつ）する。
がっとそそり立った大岩塊が
いま永劫の風化を展開する。
荒っぽいタッチの稜線だが
それでいて手のこんだ自然の造形。
あちらの尾根からぐいとおとしこみ、
こちらの弧峯に靄ともつかぬ雲をまつらわせ、
谿間々々はべっとりと残雪の化粧だ。
――あの鋸歯にただよう山気こそ
解体による結晶を示しているな。
――あの山襞にひそむ息吹きこそ
悩みを通した歓びをうたっているな。
俺の魂はいつしかこの展望をむさぼる一点となって
天と地との境界にわたないた。
みなぎりわたる光の下、
ただ壮麗の岩峯に
山霊は蕭々（しょうしょう）とひびきあう。

（一九四八年七月）

（『うすあおい岩かげ』（PP.29-30））

うすあおい岩かげ　1

ものおともたえ
ひかりもまだらに
かぜもよどみきる
みしらぬうすあおい岩かげに
ひっそりといだきあい
ひとみにひとみを映してはとおい神話のなごりに酔い
こころのさびしさに燃えたってはいたいけな息のほのめきに
ふと　あらあらしく
つつましいくちびるをうばいたい

（一九四八年九月）

（『うすあおい岩かげ』（PP.11-12））

あの頃の歌　5

雑草のなかに日が暮れる。
たでが穂をゆり、
とおくとおく鳥が落ち、
ほろほろとけむりのあがる
麓の村に灯がともる。
胸のなかは荒れはてたまんまだが
わずかに残った心の隅の静寂は、
ゆうべの風にも戦くし
ゆうべの靄にもしょんぼりする。
草の実のこぼれる頃の荒野にも
こんな寂しがり屋はないようだ。

（一九四八年九月）

（『うすあおい岩かげ』（PP.18-19））

成長　3

小鹿のようにういういしく
はじらいとゆめのさなかに
ひとみをおののかせている少年よ
ひとり草むらにふしころんで
しなやかな四肢のうちがわに
ふしぎなときめきをおぼえている少年よ
さてもうつくしいゆうべだが
みしらぬかげのゆれうごく
媚にあふれた草の香りに
ああ　君はもう感じているね
そだちゆく　なやましさを
天井から堕ちた　かなしさを
まあるい大地に満ちた　むなしさを
ああ　君はかんじているね
さわやかにうつくしい少年よ

（一九四八年十一月）

（『うすあおい岩かげ』（PP.14-15））

これら四篇は、先の「帰ってくるものに」（3月）に続いてすべて「文学集団」に掲載された作品である。杜夫は仙台に行ってから松本を懐かしみ四月、五月と度々松本を訪れており、「医学部というところ」（『どくとるマンボウ青春記』）には、日記「（前略）この街は。おれの稚さが住んだ街。そりゃあ懐しさは湧くだらうよ。悔しさはつきまとふだらうよ（後略）」を紹介し、当時の松本の印象を「痛切な追憶のぎっしりつまった何ものか」（傍点杜夫）と記している。菊田茂男「仙台時代の北杜夫に関する資料稿―『文学集団』への投稿を中心として―」の「六、『文学集団』に掲載された北杜夫（北宗夫）の作品」[40]には、入選作品の詳細が整理されているが、本論考では選者の村野四郎の選評を以下に引用し、寸評を添えて列挙する。

「穂高を見る」

北宗夫君の「穂高を見る」は重量のある立体感が特徴である。全体としての心象の構成が、きん密に且つ合目的々に組みあげられている。しかしその誇張のポオズに少し臭いところがある。

一篇の「穂高」は昭和二十二年十月の茂吉の手紙により神経衰弱に陥った杜夫が自らを回復させようと望んだ穂高岳であり、松本行の帰路に望んだ穂高岳の印象とも考えられる。

「うすあおい岩かげ」

「うすあおい岩かげ」は手のこんだ抒情詩だ。ちょっと大手拓次の詩を想はせる。心霊的な動機がかよっている。感情の適度の節制と、言葉に対する細かい心づかいは、この詩人の危げのない成長を思はせている。

『幽霊』の圧巻や『神々の消えた土地』に描かれた「ダフニスとクロエー」等の「神話」につながる題材である。当時の杜夫は追憶により自己の神話（松本時代）を表現したものと考えられる。

「あの頃の歌」

北宗夫君の「あの頃の歌」は詩の中心が力弱く不鮮明な点がおしまれた。

ここに描かれる心象は、「初めに空腹ありき」（『どくとるマンボウ青春記』の冒頭の「もの寂しい光景」と類似しており、杜夫の内面に在った松本のイメージを表現したものと考えられる。

「成長」

（前略）今月号では、柳洋一君の作品と北宗夫君の作品がすぐれていた。その間に甲乙はつけがたい。（中略）北宗夫君の「成長」は詩のモオチブとしては新しくないが、その感じ方に非常にナイイブな新鮮さがある。「天上から堕ちた……まあるい大地に満ちた……」あたりこの詩の魅力の頂点であつて、この作品に美しい知性の輝きを与えている。「帰つて来るものに」にも、やさしい息づきや、まなざしが感じられるが、抒情が「成

長」のように整理されていないうらみがある。少し情緒に酔ぱらい過ぎているようだ。

杜夫における「少年」という題材はやがて『少年』[41]に結晶していった。松原新一がその「解説」に述べるように、「成長」における「少年」はハーバート・リードの「真率性」にみられる「無垢の純真性」につながっていく「少年」であるが、まだ、原型的で感傷的な抒情を漂わせている。杜夫が自身の成長を徐々に客観視し始めた心境を表現していると考えられる。

これら四篇は先の「帰って来るものに」に「つづりあわそう　ひとつの　私の物語として」と予告した通り、松本時代の体験を「穂高」「岩かげ」「あの頃」「ひとり草むらにふしころんで」等の叙述に込め、過去の体験を追憶しながら作品を描いていると考える。

杜夫における「追憶」については松原が「失われたものの回想＝回収」と述べているが、辻邦夫は杜夫との対談[42]で、現代文学によく取り上げられる「過去」の問題について「ものの次元では、万物は絶えず流転している」が、「観念の次元に立つと、〈過去〉というのは（中略）生きていて、一種の実在になって、存在している」と述べ、以下のように対談している。

辻　（前略）〈現在〉を見てわれわれは、いかにも時間が刻々と過ぎ去っていって、〈過去〉は全部なくなってしまっていると言うけれども実際は、われわれにとって〈過去〉はつねに存在していることになる。われわれが実際に人そのものに直接ぶつからないと同じように、〈過去〉というものは、われわれから消えない。〈過去〉はわれわれにとって、――観念的存在であるほかに人間にとって、本質存在である。ほんとの存在である、と言える。

北　それは、人間にむかしからついていたかどうかわからんけれども、尻っ尾みたいなものだな。（傍点引用者）（P.161）

この対談を踏まえて杜夫の追憶を考えると、杜夫にとって追憶する過去は、自己の身体と常に一体となっており、「尻っ尾」のように実感する実在的なものであったと理解することができる。杜夫が「痛切な追憶のぎっしりつまった何ものか」という過去（松本時代）は、内面において、極めてリアリティーのある実在的な過去であったとも考えられる。杜夫は仙台に行ってから、松本では未だ析出されず、詩作品に至らなかった記憶に残る想を、念々脳裏に思い浮かべながら、追憶を重ね、詩作品として仙台で結晶化させていったと考えられる。

（3）仙台時代の詩　②（少年からの絶縁）

昭和二十四年（杜夫二十二歳、東北大学二年）になると、詩の題材は仙台での体験や心境・心象が中心となり、松本時代の直接的な追憶は見られなくなる。以下に執筆年代を追ってあらましを列挙する。

三月　詩「細菌教室にて」……医学部での授業の体験。
　　詩「愚問」……詩についての問い。
四月　詩「優曇華」……箱根山荘での体験。
四月　詩「漂流」……小舟で漂流するような孤独な心境。
五月　詩「かげりゆく心に」……彷徨いさすらう虚ろな心境。
五月　詩「絶縁状」……自己の魂の遍歴と自己に向けた絶縁状。
五月　詩「果のないゆらめき」……あどけなさが揺らめく心象。

六月　詩「蒼天」……原始の蒼天の下に抱くような淫心。
八月　詩「Schönheit」（「美について」）……美についての心象風景。
八月　詩「黒い高原」……暗く重いタッチの高原風景。
八月　詩「出発」……青年の心理的な新たな出発の決意。

野島秀勝は「解説」[43]の冒頭に、「絶縁状」の結び「前代未聞に孕み尽して／お目にかかることもありましょう――」を引用し、その再会の約束のように、若き詩人北宗夫が作家北杜夫に成長していったと指摘し、「絶縁状」「出発」は「少年」との別れであったと述べている。その後、『硫黄泉』の語り手が「《〈自然〉》が病んではじめて《〈精神〉》になる」というように、自然状態の抒情的な「少年」はやがて「精神」を獲得していくこととなる。先の「成長」に述べたように、杜夫における「少年」（「無垢の純真性」）は「精神」と「自然」という対立命題の認識の深化をみながら、その後の『幽霊』へと結実していった側面があると指摘しておきたい。

三、松本時代の位置

1　諸相の統合

本節ではまず、これまで本論第二章「初期詩篇等の様相」で考察を進めてきた六つの様相を概観し要約したところで、その諸相をひとまずまとめ、松本時代の杜夫の全体像について筆者なりの統合を試みていきたいと考える。更に、北杜夫文学における松本時代の位置を措定し、本論考のまとめとしていきたい。まず、それぞれの様相を以下にまとめ、箇条書きにし列挙する。

（1）「答案用紙への詩等」より

昭和二十一年十二月、松本高校二年の学期末試験で杜夫は、難しく手が出ない物理の問題の解答用紙に、詩やイタズラ書きを書き、教授には気さくに言いたいことを言い、持ち前の明るい雰囲気をまいていた。また、哲学書を読んではそのパロディーを捻出し「太陽党」を結成したり、「瘋癲の哲理」を大書して部屋に貼ったりし、「純粋な遊び心」をもって、高校時代を楽しみ遊び謳歌するような様相があった。

（2）「寮歌」より

寮歌に描かれる青年の涙や理想、戦い、孤独、寂寥等は杜夫にとって実感をもって享受されており、様々な場面で耳にし歌われていた。また杜夫自身が昭和二十一年度寮歌「人の世の」を作詞していること、晩年の杜夫の枕元にも寮歌のカセットテープが置かれていたこと等から、杜夫にとって寮歌の詞やメロディーは身に沁み付くほどに感じられていたものと察することができる。こうした寮歌に青年の思いを重ね共感し、作詞するほどの熱い思いを寄せる様相があった。

（3）「ファーブルへの憧れ」より

麻布中学校の理科学部（クラブ）に入って昆虫採集をしていた頃からの「昆虫学者になりたい」という杜夫の夢は、焼土と化した東京から松本へと移り、一層大きくふくらんでいった。松本高校時代は王ヶ鼻、三城、上高地等に度々昆虫採集に訪れ、採集の喜びと共に、昆虫の微細な世界を詳細に観察し、それらを作品に描いていった。「蟲と共に」では、昆虫の世界に心を慰められ強い関心を抱いて観察していた杜夫が、ファーブルを理想とし、野山に出かけていきたいと描いた。「山村にて」には、新緑の上高地や昆虫との出会いに胸を弾ませていく様子を表現した。また、「六脚蟲の世界」には、昆虫学者への夢は昆虫の命への共感となり、昆虫を愛し詩に表現し

ようとする純粋な思いは将来への決意となっていった。このように、中学校以来、松本へ来ても昆虫への熱は徐々に高まっていき、夢や憧れは、ついに将来への具体的な進路（動物学志望）の自己決定へと意欲が高まっていったところに、松本時代の昆虫に関わる特徴的な様相があった。

（4）「精神的思春期」より

昭和二十年九月二十日、学校が再開されると上級生の哲学的、文学的な話に影響を受け、精神の胎動のごとく杜夫は読書に没頭していった。その姿は「精神の飢餓」とまで表現される程旺盛なものであった。茂吉の短歌はもとより、芥川龍之介、トーマス・マン、リルケ、高村光太郎等には特に強く惹かれていった。また、茂吉の短歌により覚醒した杜夫の文学観、自然観等を更に拡大、深化、増大していったと考えられるのが、茂吉、光太郎、リルケ等の文学の底流に共通して流れるロダンの芸術観であったと察せられる。このように、ダイナミックに精神的思春期の萌芽していく様相があった。

（5）「夢の断念」より

松本時代に杜夫が茂吉から受け取った書簡を詳しく整理した結果、昭和二十二年になると杜夫の成績や進路について茂吉が心配をし始め、やがて、十月十六日の手紙により杜夫は動物学志望を断念せざるを得なくなり、医学部の受験勉強に向かっていくこととなった。杜夫はこのことから精神衰弱状態となり自ら穂高岳の威容を望み、一旦は改善されたように感じられた。しかし、夢断念の直後の受験勉強は杜夫にとって辛い日々であった。十一月の詩「寂寥」には深い寂しさが題名に象徴されている。つづく「停電哀歌」ではかつての「黄金時代」が思い出される中、敢えて受験勉強に向かわざるを得ない寂しさが表現された。また、十二月になると「木枯」に、当時杜夫が聞いた木枯の幻影を抱き、茂吉の厳命に戸惑うような寂しい心象を描いていた。更に、「日記十二月五日」では茂吉を理解しきれず、自己に湧き起こる「フンヌ」「フンマン」への苛立たしさや、フラッシュバックするような精神的な不安定さが描かれた。

松本時代の終り頃、杜夫は寂寥感や孤独を抱えながら、受験勉強に向かっていった辛い様相があった。

（6）「アイデンティティの危機から認識の深化へ」より

松本時代の末期、昭和二十三年一月から三月にかけては、茂吉の厳命を受け、医学部受験に向けて勉強しながら、内面的には茂吉との相克に悩み、茂吉の体質と自己のアイデンティティを見つめながら、不安定な日々を送りつつも、徐々に仙台に憧れを抱くようになっていく姿があった。更に、東北大学入学後は、松本時代を懐かしみつつ、自己の「少年」を客観視し始め、「精神」と「自然」の対立命題の認識へと精神的に徐々に深化していく様相があった。

（7）まとめ

本論考で見出したこれらの様相は、もとより単独で存在するものではなく、当然杜夫の内面に於いては極めて有機的に相互に関連し影響し合い、作品へと結晶化していったものであったと考える。「純粋な遊び心」「身に沁みつくほどの寮歌」「昆虫への熱い思い」「精神的拡充への志向」「ダイナミックな精神的萌芽」「寂寥感や孤独感」「不安定な自己認識」等こられの様相は三年間の松本時代のある時期に色濃く映し出された杜夫の様相ではあったが、個々の様相相互は様々なコントラストを生み出し、響き合ったり融合し合ったりし、杜夫という人間、文学作品を形成していったと考えられる。

やがて、杜夫は仙台時代に詩から短篇、小説へと表現方法を変化させていき、作家として自立していくこととなるが、純文学、マン

ボウもの等のユーモアあふれるエッセイ、中間小説、ファンタジーやSF、童話、伝記等裾野の広い多彩で多岐にわたる作品を描いていく根源的な素地が、松本時代のこれらの様相であったと考えることができる。それがその後の杜夫の人生とどうとつながり、深化・変奏しながら作品へと結晶化していったかの詳細な検証は、今後の研究に待たれるところである。杜夫の文学を理解していく上で、松本時代の特徴的な様相は決して見逃すことができない起点になっていると指摘しておきたい。

2　文学覚醒と精神的萌芽

田畑麦彦は「出発期の北杜夫―『文芸首都』と「幽霊」」[44]において、『牧神の午後』の「あとがき」に注目し、杜夫の「私の初期作品の集大成が「幽霊」といつてよく、私としてはこの作品を読んでもらふことで、ここに集めた他の作品を切り捨ててもよいと思つたのである」を引用し、「幽霊」の執筆時期が「北杜夫の最も初期の時代、というより、もっともプリミティブな時代、もっとも原始的な時代、と呼ぶことができるだろう」（傍点引用者）と述べている。その根拠として、『牧神の午後』に収録された作品が「幽霊」に集約され、その後の「楡家の人びと」「酔いどれ船」の中に流れ込んでいることを指摘している。更に『文芸首都』と杜夫との関係に目を向け、杜夫の「勉強会」での印象を「当時の北杜夫には、その柔かさと強靭さがともに滲みでていた」と紹介し、杜夫が柔らかな強靭な資質をもって自己形成していた点を指摘している。また、杜夫の『牧神の午後』に収められた作品群のように、「明らかに最初から世に問うのではない一連の作品群がある」ことを述べ、杜夫が、「自分の本当に柔かい肌を人にさらす」中で「おのれの均衡を保ち、おのれの自己という本当にながいテーマを追求」していると指摘している。こうした点から、田畑は、杜夫が当時好んで使っていた「薄明」を引き『幽霊』執筆期を「薄明の時代」（傍点引用者）と命名している。

この田畑の論考を踏まえて、松本時代を概観すると、『幽霊』執筆期より更に前の時期ということになる。かつて杜夫が、『牧神の午後』の初期短編をさらすことにより自己というテーマを追求していたように、杜夫は晩年になり、作品の稚拙さを承知の上で、初期短編より更に稚拙とも言い得る松本時代の歌集『寂光―北杜夫若年歌集』や詩集『青春詩集　うすあおい岩かげ』を刊行していると考えることができよう。このことは晩年の杜夫が自己を表現していく上で、松本時代の作品をさらすことは、或る種の精神的バランスをとることにつながっていたのではないかと考えられる。

先の論考「其の一」では、茂吉短歌により文学に「覚醒」した杜夫が詠んだ短歌、『寂光』の解釈を行った。そして、杜夫が逝去してから「軽井沢歌稿」が発見されたことを紹介し、辻邦生との対談における精神の「萌芽」と「回帰」を『寂光』と「軽井沢歌稿」として指摘した。「其の一」で論考した『寂光』の短歌及び、本論考で研究対象とした松本時代の初期詩篇等は、いずれもその萌芽期の作品である。

これまで、杜夫の文学的な作品形成の時期については、田畑が指摘するように小説を書き出し、「文芸首都」に作品を発表するようになっていった仙台時代が、「北杜夫文学の初期の時代」と考えられているが、それ以前の松本高校時代については、あまり明確な区切りはされていなかったと考えられる。仙台が初期であり、「プリミティブな時代」「原始的な時代」「薄明の時代」と命名することが可能で

あるならば、松本時代は、まさに「北杜夫文学の文学覚醒と精神的萌芽の時代」と位置付けることができると考える。恐らく杜夫は晩年になるにつれ、辻邦生との対談における精神の「萌芽」と「回帰」を実感していったのではないかと推察する。思えば、杜夫が逝去する直前まで、自宅寝室の枕元に寮歌のカセットテープを置き、聞き楽しんでいたという姿は、まさに「回帰」そのものであったと受けとめることができる。

おわりに

本論考で挙げた六つの様相は、筆者が当時の杜夫の実際の生活背景に目を向けながら、作品を解釈し、必然的に特出可能と考えられる際立った姿として把握していったものである。これらの様相は、他の観点の可能性を見出すことにより、更に深化拡大したり変化したりする可能性があると考える。読者各位のご批判にゆだねたい。

杜夫が逝去して三回忌となる平成二十五年、齋藤喜美子夫人は「松本の思い出―あとがきにかえて」[45]に杜夫との松本の思い出を紹介されている。そこには、杜夫が「信州、松本を第二の故郷のように思っておりました」と回想され、昭和三十六年、ご結婚された年に初めて杜夫と松本を訪れ、杜夫が生涯敬愛した望月市恵教授宅ご訪問の思い出や、杜夫が三城牧場や王ヶ鼻を案内した時のこと等を記されている。また幾度か杜夫と一緒に上高地を訪れた思い出や松本高校時代について杜夫が語った内容を紹介されている。そして、夫人はその貴重な寄稿の最後に次のように記されている。

松本高校での三年間がなければ文学者としての自分はなかった、と自身で申しておりましたが、友情を育み、豊かな信州の自然や大好きな昆虫にふれることのできた、松本での青春の日々が北杜夫の根底にあります（後略）。

（北杜夫夫人　平成25年5月24日・談）

本稿作成に当たり旧制高等学校記念館学芸員の石原花梨様には資料検索等のご協力をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

注

(1)「信州大学附属図書館研究　第六号」（平成29・1・31）
(2)「企画展　北杜夫展―ユーモアがあるのは人間だけです」（平成28・9・17～11・23）山梨県立文学館）にて松本高校時代の日記が展示された。
(3)松本市立博物館分館（長野県松本市県3‐1‐1）
(4)「昭和二十一年度思誠寮寮歌」、「思誠三月　第二十四号」（思誠寮東寮西寮文化部、昭和22・8・15）、「編集後記」には「四六年度の寮は九月にはじまつたため、原稿募集は二月十一日を締切日とした」とある。注(4)・(5)の関連写真は旧制高等学校記念館所蔵資料による。
(5)旧制松本高等学校校友会会誌「山脈」（昭和22・9・1）は昭和二十二年九月に再刊された。
(6)北杜夫『或る青春の日記』（中央公論社、昭和63・11・7）
(7)北杜夫『青春詩集　うすあおい岩かげ』（中央公論社、平成5・10・25）「あとがき」に「この青くさい詩集は、『文学集団』『詩学』に入選したもの（北杜夫全集第十五巻に収めてある）を初め、その他の未発表の詩をまとめたもの」(P.148) とある。
(8)「小さき疾風怒濤」、（「どくとるマンボウ青春記」、『北杜夫全集　第十三巻』（昭和52・9・25））
(9)『松本まるごと博物館連携企画展「北杜夫と松本」展示解説図録』（松本市立博物館、昭和25・7・13）
(10)松崎一『惜春の詩』（電算印刷株式会社、昭和59・12・30）
(11)前掲注(9)参照。
(12)同窓会に許諾を得て掲載。
(13)「まんぼう、憶い出を語る」（「どくとるマンボウ昆虫記」、『北杜夫全集　第十二巻』（新潮社、昭和52・4・25））
(14)前掲注(13)参照。
(15)前掲注(9)参照。
(16)北杜夫『マンボウ思い出の昆虫記―虫と山と信州―』（信濃毎日新聞社、平成25・7・13）
(17)「Ⅱ北杜夫と昆虫」前掲注(9)参照。
(18)『北杜夫全集　第十五巻』（新潮社、昭和52・11・25）
(19)「図書室」は『どくとるマンボウ青春記』に度々記述されるが、旧制高等学校記念館並びに信州大学附属中央図書館に確認を取ったところ、当時の学生が通常に言う「図書室」は寮の「図書室」を指し、「図書館」は学校の「図書館」を指していたことが確認できた。また、寮の「図書室」の蔵書目録は、旧制高等学校記念館企画展「松高生の青春日記4―自治こそ寮の誇りなり―」（平成29・3・4～5・7）の「図書部資料」で展示された。「図書室」の図書台帳及び旧松本高等学校図書館の当時の蔵書は信州大学附属中央図書館に現在所蔵されている。
(20)南森孚「北杜夫とトーマス・マン」（「人文学部紀要第21号」、神戸学院大学人文学部、平成13・3・31）
(21)北杜夫・辻邦生『北杜夫・辻邦生対談―若き日と文学と』（中央公論社、昭和45・7・10）
(22)「人間とマンボウ」前掲注(18)参照。
(23)箱根山荘の茂吉の勉強小屋は、茂太により山形の茂吉記念館に寄付され「童馬山房」と命名。（Ⅱ「つきかげ」時代、『茂吉晩年』参照。）
(24)北杜夫『マンボウ最後の家族旅行』（実業之日本社刊、平成24・3・25）
(25)北杜夫『幽霊』角川文庫（昭和43・2・20）
(26)「三島由紀夫との出逢いと北文学の未来」（「ぼくらの文学奇縁」奥野健男・北杜夫、『別冊新評「北杜夫の世界」』新評社、昭和50・4・15）
(27)「傲慢と韜晦」（北杜夫『マンボウおもちゃ箱』新潮社、昭和42・9）
(28)高安國世「リルケの生涯」、『鑑賞世界名詩選　リルケ』（筑摩書房、昭和29・7・1）
(29)「リルケ年譜」、『リルケ全集　第7巻』（彌生書房、昭48・9・5）
(30)『リルケ全集　第5巻』（彌生書房、昭和48・12・5）

(31)「昭和十七年九月十五日」(PP.26-30)、田中隆尚『茂吉隨聞上巻』(筑摩書房、昭和50・9・30)には、茂吉と田中の「リルケの「Requiem」」についての対話が記されている。

(32) 高村光太郎『ロダンの言葉』(阿蘭陀書房、大正5・11・27)

(33) 北杜夫「死」、『北杜夫全集　第五巻』(初出「世界」昭和39・3)

(34)「特集北杜夫の文学世界」『國文学　解釈と鑑賞』(至文堂、昭和49・10)

(35)「竹」は火吹竹(火起し竹)のこと。火を吹き起したり焚き付けたりするのに使う道具。一端に節(ふし)を残して小さな穴があけてある。長さ60㎝ぐらいの竹筒。

(36) 北杜夫「4憤怒など」(PP.276-278)、「マンボウすくらっぷ―単行本未収録エッセイ他―」、前掲注(18)参照。

(37)「アイデンティティ」はエリクソン(アメリカの発達心理学者、精神分析家 Erik Homburger Erikson, 1902.6.15-1994.5.12)が提唱。主に心理学・社会学において、ある者が何者か、他者から区別する概念、品質、表現等をいう。当初は「自我同一性」(ego Identity)と言われていたが、「自己同一性」「同一性」等と言われるようになった。アイデンティティは青年期の発達課題でもある。

(38) 北杜夫『世を捨てれば楽になる』(河出書房新社、平成27・4・30)

(39) フモール「ラテン語でユーモアの意だが、原義はギリシャ語の体液。」(北杜夫『青年茂吉』(P.84)

(40)「日本文化研究所研究報告　別巻　第十四集(東北文化研究室紀要通巻第18集)」東北大学日本文化研究所、昭和52・3・30)

(41) 北杜夫『少年』(中央公論社、昭和45・11・5)

(42) 前掲注(21)参照。

(43) 野島秀勝「解説」、北杜夫『黄色い船』(新潮社、昭和53・10・27)

(44) 前掲注(34)参照。

(45) 前掲注(9)参照。

参考文献

1 『北杜夫全集』全十五巻(新潮社、昭和51・9・25～昭和52・11・25)
2 『齋藤茂吉全集』全三十六巻(岩波書店、昭和48・1・13～昭和51・4・30)
3 『リルケ全集』全七巻(彌生書房、昭和48・4・15～昭和49・9・5)
4 北杜夫『歌集　寂光―北杜夫若年歌集』(中央公論社、昭和56・4・20)
5 北杜夫『青春詩集　うすあおい岩かげ』(中央公論社、平成5・10・25)
6 北杜夫『青年茂吉』(岩波書店、平成3・6・27)
7 北杜夫『壮年茂吉』(岩波書店、平成5・7・29)
8 北杜夫『茂吉彷徨』(岩波書店、平成8・3・8)
9 北杜夫『茂吉晩年』(岩波書店、平成10・3・16)
10 田中隆尚『茂吉隨聞』上下巻(筑摩書房、昭和50・9・30)
11 板垣家子夫『斎藤茂吉随行記―大石田の茂吉先生(上下巻)』(古川書房、昭和58・5・18)
12 柴生田稔『斎藤茂吉伝』(新潮社、昭和54・6・26)
13 斎藤茂太『茂吉の体臭』(岩波書店、昭和39・4・27)
14 奥野健男『北杜夫の文学世界』(中央公論社、昭和53・2・10)
15 辻邦生『トーマス・マン　20世紀思想家文庫1』(岩波書店、昭和58・1・24)
16 辻邦生『薔薇の沈黙―リルケ論の試み―』(筑摩書房、平成12・1・20)
17 塚越敏『創造の瞬間　リルケとプルースト』(みすず書房、平成12・5・25)
18 谷沢永一・辻邦夫『新潮日本文学アルバム14斎藤茂吉』(新潮社、昭和60・3・20)
19 『別冊新評「北杜夫の世界」』(新評社、昭和50・4・15)
20「特集北杜夫の文学世界」『國文學　解釈と鑑賞』(至文堂、昭和49・10)